



Title	少女雑誌にみる近代少女像の変遷：『少女の友』分析から
Author(s)	今田, 絵里香; IMADA, Erika
Citation	北海道大学大学院教育学研究科紀要, 82, 121-164
Issue Date	2000-12
DOI	<a href="https://doi.org/10.14943/b.edu.82.121">https://doi.org/10.14943/b.edu.82.121</a>
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/28817">https://hdl.handle.net/2115/28817</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	82_P121-164.pdf



# 少女雑誌にみる近代少女像の変遷

——『少女の友』分析から——

今 田 絵里香

## The Changing Image of Modern Girls in Girl's Magazines : Analysis from the Magazine "Shojo-no-Tomo"

Erika IMADA

### 目 次

序章	121
第1章 分析の素材と方法	122
1 少女雑誌の誕生と『少女の友』	122
2 少女雑誌の読者層	125
3 分析の視角と方法	128
第2章 無知で無力な少女：明治後期・明治41～45年（1908～1912年）	131
1 数量的分析の結果	131
2 創刊のころの『少女の友』	133
3 無知で無力な少女像	134
第3章 家族への愛情のために自己を捧げる少女：大正前期・大正2～8年（1913～1919年）	136
1 下田歌子と『少女の友』	136
2 家族への愛情のために自己を捧げる少女像	137
第4章 自己と家族の間で葛藤する少女：大正後期・大正9～15年（1920～1926年）	139
1 第一次世界大戦後の『少女の友』	139
2 自己と家族の間で葛藤する少女像	139
第5章 自由と自己実現を謳歌する少女：昭和初期・昭和2～14年（1927～1939年）	142
1 モダンガールの登場	142
2 自由と自己実現を謳歌する少女像	143
第6章 直接的な国家奉仕をする少女：戦時下・昭和15～20年（1940～1945年）	145
1 「雑誌浄化運動」	145
2 直接的な国家奉仕をする少女像	146
終章	148

### 序章

久米依子（1997）によれば、「少女」という呼称が、一般化したのは明治30年代以降であるといい、本田和子（1990）によれば、童女と人妻の間の期間を「少女」ととらえ、その代表的な存在としてとらえられる「女学生」が急増したのも、明治30年代以降のことであるという。本稿の目的は、「少女」というカテゴリーが誕生した明治末以降、「少女」イメージを分析し、「少女」がどのようなものとしてとらえられていたのかを明らかにすることにある。これまでの研究において、近代の女性イメージをさぐるとき、「少女」を女性総体からとりだし、そのイメー

ジをさぐりだすような研究はほとんどなされてこなかった。したがって、「少女」へのまなざしも近代の代表的なジェンダー規範である良妻賢母というまなざしだけで片づけられてしまうことが多かった。しかし、まだ妻とも母ともならない「少女」へのまなざしは、良妻賢母というまなざしだけではとらえきれないのではないだろうか。近代に誕生した「少女」は、一方で、「女性」であるために家族につくすべき「将来の良妻賢母」として位置づけられていたのは確かである。しかし、他方で、「少女」は実際には「子ども」でもある。近代家族のなかでは、「子ども」という存在は、家族に愛護されつくされるべき存在である。したがって、近代家族のなかの「少女」には、家族につくす「将来の良妻賢母」としてのまなざしだけではない、家族につくされる「子ども」としてのまなざしも向けられていたのではないだろうか。はたして、「将来の良妻賢母」と「子ども」の狭間のなかで、「少女」はいかなるものとしてとらえられていたのだろうか。そして、良妻賢母という回路が夫を支え男児を産み育てることで女性を間接的国民としてとらえていく回路であるなら、「少女」はいかなる回路で国民としてとらえられていくのか。

本稿では、それをさぐりだすため、近代の少女雑誌『少女の友』の掲載小説にあらわれた少女像をみていくことにした。「少女」とは将来こうなるべきだとされていたのが、女子教育の理念である良妻賢母という規範である。それでは、人々に、特に少女たち自身に今ある「少女」とはどのようなものとして社会的に共有されていると思われていたのだろうか。それにはメディアによるイメージの共有が大きな役割を果たしているとおもわれる。

近代の少女雑誌は、少女たち、特に近代家族を実態化した新中間層の少女たちの、もっとも頻繁に接したメディアである。したがって、少女雑誌の「少女」イメージは、現実がどうであれ、また、それを肯定的あるいは否定的にとらえるのであれ、読者である新中間層の少女たちが自らについて社会的に共有されていると思っていたものであると考えられる。つまり、社会的観念（山村 1971）、社会意識（坂本 1991）としての「少女」と考えられるのである。はたして、近代の少女雑誌で語られた「少女」がどのようなものであったのか、つまり、社会意識としての「少女」がどのようなものであったのか、それが時代とともに変容していくさまを追いつつあきらかにしてみたい。

そこで、第1章では、『少女の友』の特徴や、読者層、さらには、『少女の友』を分析するときのや分析方法を述べていく。第2章以降、『少女の友』の分析結果をあきらかにし、そこに少女に対するどのようなまなざしがあるのか、またそれがどのように変遷していくのか、それをあきらかにすべき将来の女性像としての良妻賢母という規範とどうかかわっているのかあきらかにしながら、述べていく。

## 第1章 分析の素材と方法

### 1 少女雑誌の誕生と『少女の友』

明治27年（1894年）の日清戦争、明治37年（1904年）の日露戦争の二つの戦争を契機として、明治20～30年代、産業界の発展とともに出版界も栄華をきわめ、新しい出版社と雑誌が次々に誕生した。このように飛躍的に発展してきた出版界のなかから、まず、少年雑誌が、少年園の『少年園』（明治21年創刊）を皮切りに、博文館の『少年世界』（明治28年創刊）、実業之日本社の『日本少年』（明治39年創刊）、講談社の『少年倶楽部』（大正3年創刊）と、次々に誕生する。

少女雑誌の登場は、少年雑誌の創刊からくらべると、やや遅れる。明治20年代前半までは、少

女と少年は未分化で、たとえば、明治21年創刊の『少年園』に女子読者を排除する姿勢はみられないという(久米 1997)。そのうち、明治28年(1895年)9月、『少年世界』に「少女欄」が開設され、やがてそれが、少女雑誌誕生につながっていく(久米 1997)。まず、金港堂の『少女界』(明治35年創刊)が最初の少女雑誌として売り出されると、大日本少女会の『日本の少女』(明治38年創刊)、近時画報社の『少女智識画報』(明治38年創刊)、そして、博文館の『少女世界』(明治39年創刊)と、続々と少女雑誌が誕生する。

このような流れのなかで、実業之日本社の『少女の友』は明治41年(1908年)に創刊された。『少女の友』は、創刊の当時、A5判、104ページ、定価10銭(実業之日本社社史編纂委員会 1997)。この時期、児童雑誌が「巖谷小波一色のおとぎばなし時代から、童話へ、小説的な物語へと移行しはじめた時期」(日本近代文学館 1977, 165頁)といわれる。『少女の友』は、それまで少女雑誌の王者として君臨していた『少女世界』が「巖谷小波中心の雑誌で、おとぎばなし雑誌のイメージを脱していなかったこともあって、明治末から大正中期にかけての少女読者の強い支持を受け」ることになった(日本近代文学館 1977, 165頁)。このように、『少女の友』は、創刊から常に、おとぎばなしというよりはどこにでもいるようなきわめて現実的な少女を主人公にした小説中心に、その誌面が構成されている。ただし、他の少女雑誌同様、男性との恋愛をテーマにした小説は絶対のタブーとされ、『少女の友』の主筆(現代の編集者にあたる)のなかでも比較的新しい考え方をもっていた昭和初期の主筆、内山基でさえ、「男の方との交際はもつてのほかです」と、誌上で断言していた(遠藤 1995-1997 [15])。また、実業之日本社の社員たちは、編集者であると同時に雅号をもつ作家として雑誌に作品を発表していたため、編集者の雑誌への影響は大きかった。『少女の友』においてもそれは顕著で、大正8~13年(1919~1924年)、昭和2~6年(1927~1931年)と主筆として在職した岩下小葉は、その主筆時代を回想して次のように述べている。『少女の友』に於ては他の少女雑誌と異なり、記者は毎号、小説を発表する義務があり、従つて『少女の友記者』となる資格の一つとしては、優れた少女小説家であらねばなりません。記者の小説が、その号の呼び物であり、またそれによつて大多数の愛読者を抱擁してをつたことは事実でありました。雑誌の蔭にかくれて、ただ編集事務をのみ執ることは、記者の大なる恥辱とさへ考へてみたのであります(『少女の友』昭和7年1月号)。『少女の友』は、そのため、きわめてその時代ごとの編集者、特に、主筆の色が出やすい雑誌であったといえる。

『少女の友』の主筆は、太平洋戦争終結まで、実質、4回の交代があった。創刊のころの主筆は、星野水裏。星野は『少女の友』大正2年の春の創刊号で、創刊のころを回想し、「雑誌さへ出せばいいものだとはい等は思はない。読者の品性がどうであらうと構はないものだとはい等は思はない。父母兄弟が其弟妹の身の上を思ふが如く、我等は我が少女の友の愛読者が一人たりとも立派な少女になるやう、少女の友を読んだが為、世間の誉められ者になつたといふものが一人でも多く出るやうにと願つた」と述べるように、教育者的な信念をもつて編集にあたっていた。さらに、星野は、大正2年(1913年)ごろから、良妻賢母教育を提唱する女子教育家、下田歌子の随筆、訓戒を積極的に『少女の友』に載せるようになり、その教育的な態度をますます露骨なものとしていった。

大正の中期から、実業之日本社受難の時代に入り、他の出版社の勢力拡大の前に同社は激しい勢力争いを繰り広げるようになる。たとえば、同社の有力雑誌である『婦人世界』は、東京家政会(のちの主婦之友社)の『主婦之友』(大正6年創刊)をはじめとする有力競争誌が、「第一次

世界大戦中の好景気によって急増していた『中等階級』の婦人、職業婦人などの新読者の開拓のために、意欲ある誌面づくりを(『実業之日本社社史編纂委員会 1997, 85頁)しはじめたのをうけ、新しい時代にふさわしい誌面づくりを目指しはじめる。特に、「職業婦人の社会進出は、当然婦人雑誌の誌面づくりにも影響を及ぼし、創刊時から大正初期までは、良妻賢母、つまり嫁として、妻として、母としての視点から論じてきた『婦人世界』も、大正中期以降は、このような情勢を敏感にキャッチして、……一人の女としていかに生きるか、の視点から」(『実業之日本社社史編纂委員会 1997, 86頁)誌面づくりをするようになるのである。妹雑誌である『少女の友』も、その動きに対応するように、大正8年(1919年)、12年間主筆を続けた星野から、岩下小葉に主筆を交代させている。岩下は、『東京』創刊のための社内全体の人事異動で、大正13年(1924年)から昭和2年(1927年)の間、いったん、浅原鏡村に交替するものの、ふたたび昭和2年(1927年)から昭和6年(1931年)まで主筆をつとめている。

昭和に入ると、実業之日本社は深刻な業績の低迷にみまわれ、『少女の友』も、有力な競争誌である講談社の『少女倶楽部』(大正12年に創刊)の強烈な娯楽性と豪華な装飾でいどられた誌面に、多くの読者たちを奪われていく(遠藤 1993a)。当然、岩下の時代は、『少女倶楽部』への応戦のため、増ページ、講談・怪談の特集をくむなど(大正12, 13年)、『少女の友』誌面の様々な変革を強いられることになった(大阪国済児童文学館 1993)。しかし、『少女の友』は、初めのうちこそ『少女倶楽部』を模倣していたものの、昭和を迎えると新しい編集方針を打ち出すことになる。昭和3年(1928年)、内山基が実業之日本社に入社すると、内山は、主筆の岩下のもと、『少女の友』を都会的でエレガントな雑誌にしようとしはじめる(『実業之日本社社史編纂委員会 1997, 132頁)。このころから、『少女の友』は、映画や宝塚少女歌劇の記事を頻繁に載せるようになる。昭和6年(1931年)末、当時まだ28歳であった内山が岩下に代わって主筆の座に就くと、その特色はますます鮮明になっていった(『実業之日本社社史編纂委員会 1997)。

この『少女倶楽部』は、『女子だからといって日本人である以上、任侠や武勇に共感せぬ筈はない。おもしろい読物を読んでる間に、知らず識らずのうち女性の品性を陶冶していくことが大切』との社長の考えから講談を取り入れ」るなど(大阪国際児童文学館 1993, 561頁)、その「おもしろくてためになる」や「右手に教科書左手に少女倶楽部」という講談社の掲げたスローガンを忠実に体现した雑誌の内容が、「従来の少女雑誌の淡白さにあきたらない読者の心をひき、少女たちの圧倒的な支持を得ていた(遠藤 1993a, 608頁)。それに対し、『少女の友』は、売り上げ部数においては『少女倶楽部』にかなわなかったものの、昭和の初めから、『少女倶楽部』とは異なる読者層を獲得し、独自の地位を築くことに成功したといわれている。『少女倶楽部』が、小学5, 6年生という低い年齢層を読者対象としていたのに対し、『少女の友』は、女学生に焦点をしぼり、しかも、大都市の、とりわけ、東京の山の手や京阪神の女学生を標的にしようとしたのである(遠藤 1993a)。「ここから、宝塚との全面的なタイアップによるおびただしいグラビアやスターの記事、都会的な詩や創作、抒情画といった内容が生まれる。……この内容は地方の保守的な学校からは排斥されたが、学校からの制約が比較的少ない大都市の女学生からは熱烈に迎えられた。……彼女らは地方を基礎とする『少女倶楽部』の読者ほど多数ではないが、自由な空気の中で、叙情的なものへの強い要求を育てており、経済的にも概して恵まれていた」(遠藤 1993a, 608-609頁)。その一方で、『少女倶楽部』は、宝塚少女歌劇の記事を、一切、載せることはなかった。地方の女学校では、『少女の友』の都会趣味を喜ばず、『少女の友』に投書する少女は不良少女視されたこともあったという(遠藤 1995-1997〔1〕)。

秋山正美によれば、この講談社の『少女倶楽部』は、創刊の大正12年（1923年）は6万7千部、次の年は38万部発行したという。このうち、売り上げはおよそ19万部、返品率49.7パーセントである。最高部数は、昭和12年（1936年）新年号の49万2千部となっている。同じ講談社の少年雑誌『少年倶楽部』は、大正のうちに30万部を突破し、昭和11年（1936年）に75万部を記録、幼年雑誌『幼年倶楽部』は、昭和6年（1931年）に95万部に達している（秋山 1992）。少年雑誌や幼年雑誌より少ないものの、少女雑誌も、確実に一定の部数を保っていることがわかる。実業之日本社に『少女の友』の売り上げ部数の記録は残っていないが、『少女倶楽部』よりもやや劣る程度の売り上げ部数であったと考えられる。

このように、二大少女雑誌の一つとして栄華をきわめた『少女の友』であるが、戦時下、国家のマスメディアに対する規制が強化されるとともに、その誌面を変えていかざるをえなくなる。昭和13年（1938年）の婦人雑誌の記事検閲を皮切りに、娯楽誌、児童誌へと内務省の「雑誌浄化運動」が進むと、『少女の友』も、昭和14、15年（1939、1940年）ごろから、時代の流れに飲み込まれていってしまうのであった。（実業之日本社社史編纂委員会 1997）。



『少女世界』昭和41年1月号



『少女の友』昭和15年6月号



『少女倶楽部』創刊号

図1-1 近代の代表的な少女雑誌の表紙

## 2. 少女雑誌の読者層

このような少女雑誌は、いったい、読者からどのように位置づけられていたのだろうか。

大正から昭和にかけて、多様なメディアが登場し、大衆化していくなか、男性は新聞や雑誌などの他にも、映画や芝居、寄席などに頻繁に接したのに対し、女性は、あらゆるメディアのなかでも、婦人雑誌や少女雑誌などの雑誌に接することが多かった。有山輝雄によれば、大正15年（1926年）の京都市役所社会課の「職業婦人に関する調査」において、事務員、看護婦、交換手など10職種、2048名を調査したところ、雑誌を読む者は79.9パーセント、しかしながら、趣味に関する質問で約84パーセントが不明で、最高のキネマでも7パーセントにすぎないという（有山 1984）。この調査結果に、有山は、「女性の社会進出といっても、女性の自由な外出を阻む社会的制約が一因となっていただろう。そして、繁華街の娯楽である映画などの代用として婦人雑誌があったのではないか」（有山 1984, 41-42頁）と、考察している。少女雑誌、婦人雑誌は、あらゆるメディアのなかでも、女性たちのもっとも頻繁に接することのできたメディアであった

と考えることができよう。

それでは、いったい、どのような人々が少女雑誌の読者となったのだろうか。

近代の少女雑誌、婦人雑誌の受け手たる読者の調査は、困難をきわめる。全国的かつ継続的な読者調査がまったくなされていないからである。しかし、氷嶺重敏(1997)は、地方自治体・企業・学校がおこなった読者調査を拾い上げ、女工、職業婦人、女学生、女子小学生の雑誌講読のありように迫っている。氷嶺は、その作業のなかから、婦人雑誌の読者層をあきらかにしようと試みているが、同様の方法にて、ここでは少女雑誌の読者層をあきらかにしてみたい。女工、職業婦人、女学生、女子小学生の雑誌講読状況を調べた調査から、そこでの少女雑誌占有率(=講読少女雑誌延数÷全講読雑誌延数)、および、少女雑誌普及率(=講読少女雑誌延数÷調査人数)、さらに、『少女の友』占有率(=『少女の友』延数÷全講読雑誌延数)、『少女の友』講読率(=『少女の友』延数÷調査人数)を出した。それが表1-1である。この表1-1の少女雑誌普及率をみると、女子小学生にもある程度の少女雑誌普及率がみられるものの、やはり、圧倒的に高い少女雑誌普及率は女学生にみられ、少女雑誌の読者層の中核に位置していたのは女学生であったことがわかる。職業婦人や女工は、少女雑誌の周辺の読者であったといえよう。

少女雑誌のほうでは読者をどのようにとらえているだろうか。

『少女の友』には、女学校の入学試験に関する記事(「少女の友高等女学校入学練習試験」大正9年1月号など)や、小学校や女学校の様子を伝える記事(「東西女学校評判記」大正9年8月号など)が多く掲載されている。さらに、掲載小説の主人公は、そのほとんどが、女学生である。このことから、『少女の友』のほうでも、基本的に女学生をその読者としてとらえているようである。特に、『少女の友』は、大都市、特に新中間層の集中する東京の山の手や京阪神の女学生に向けて意識的に誌面づくりをしていたからなおさらであろう(遠藤 1993a)。

ところで、この新中間層は、小山静子によれば、「明治20年代から言説として語られていた家庭を実態化していく人々であった」(小山 1999, 38頁)という。小山によれば、新中間層は、第一に、俸給生活であるため、妻は生産活動から切り離され、主婦として家事・育児に専念していくことになった、第二に、継ぐべき家業をもたないために、子どもには家庭教育、学校教育がことさら熱心にほどこされることになった、第三に、新中間層は、農家から学校教育を受けるために大都市に流入しそのまま就職・結婚した農家の次男や三男たちによって構成されているため、その結果、ほとんどが核家族を形成していた(小山 1999)。この三つの特徴により、この新中間層が、近代に誕生したといわれる「近代家族」の担い手であったのである(小山 1999)。近代の少女雑誌の読者、特に、『少女の友』の読者たちは、この「近代家族」のなかで育った少女たちであるということができよう。

このように、本稿で分析する『少女の友』の少女像の受け手は、基本的に、新中間層の女学生であるということができる。すなわち、近代になって誕生した「近代家族」を実態化していた階層の女学生たちということができよう。

表1-1 少女雑誌の占有率と普及率

	調査人数 (人)/(a)	講読雑誌延数 (冊)/(b)	少女雑誌延数 (冊)/(c)	少女雑誌占有率 (%)/(c/b)	少女雑誌普及率 (%)/(c/a)	『少女の友』延数 (冊)/(d)	『少女の友』占有率 (%)/(d/b)	『少女の友』講読率 (%)/(d/a)	
女工	(A)	2350	270	69	25.6	40	2.9	1.7	
	(B)	631	292	123	42.1	84	28.8	13.3	
	(C)	231	15	2	13.3	0	0.0	0.0	
	(D)	1054	154	[9]	[5.8]	[0.9]	3	1.9	0.3
	(E)	840	101	37	36.6	4.4	37	36.6	4.4
	(F)	390	115	28	24.3	7.2	28	24.3	7.2
	(G)	3000	1414	333	23.6	11.1	104	7.4	3.5
	(H)	不明	247	17	6.9	-	2	0.8	-
	(I)	3846	397	[22]	[5.5]	[0.6]	4	1.0	0.1
	(J)	80	92	9	9.8	11.3	0	0.0	0.0
職業婦人	(K)	900	1184	[33]	[2.8]	[3.7]	10	0.8	1.1
	(L)	1190	1436	[78]	[5.4]	[6.6]	10	0.7	0.8
	(M)	800	472	[24]	[5.1]	[3.0]	0	0.0	0.0
	(N)	2048	1965	[245]	[12.5]	[12.0]	19	1.0	0.9
	(O)	1949	792	11	1.4	0.6	4	0.5	0.2
	(P)	5779	5879	[1460]	[24.8]	[25.3]	249	4.2	4.3
	(Q)	4770	6928	[116]	[1.7]	[2.4]	44	0.6	0.9
女学生	(R)	226	399	[179]	[44.9]	[79.2]	72	18.0	31.9
	(S)	90	238	[67]	[28.2]	[74.4]	38	16.0	42.2
	(T)	994	(2103)	(841)	(40.0)	(84.0)	259	(12.3)	(26.1)
	(U)	1060	2327	[986]	[42.4]	[93.0]	212	9.1	20.0
女子小学生	(V)	12218	(10045)	[(7612)]	[(75.8)]	[(62.3)]	1840	(18.3)	(15.1)
	(W)	3767	2995	[1383]	[46.2]	[36.7]	435	14.5	11.5

注1) ( ) は、回答結果の全数が不明、判明分の合計のみ。

注2) 氷嶺(1997, 174-179, 206頁)の雑誌講読状況表には、講読雑誌すべてが記載されているわけではなく、途中で省略されている表もある。そのような表については〔 〕のなかに入れた。

注3) 少女雑誌についての定義だが、ここでは、『少女世界』、『少女画報』、『少女倶楽部』、あるいは『女学生』など、その名称に「少女」あるいは「女学生」がつき、あきらかに少女を対象としているとわかるものを少女雑誌と定義した。また、婦人雑誌との中間的な存在である『令女界』、『若草』は除外した。

注4) (A)~(W)についての調査の調査対象、調査年については、表1-2参照。

資料：氷嶺(1997, 174-179, 206頁)の女工、職業婦人、女学生、女子小学生の雑誌講読状況を示した表5・6および表6・1より作成。

表1-2 戦前の女性読者調査(A)~(W)

	調査対象	調査年
女工	(A) 東京府の製糸女工	大正8年
	(B) 東京府の化粧品製造業女工	大正8年
	(C) 東京府の染色管理その他の加工業女工	大正8年
	(D) 東京府の印刷製本業女工	大正8年
	(E) 上州新町山十製糸場女工	大正9年
	(F) 武州熊川村森田製糸場女工	大正9年
	(G) 東京、大阪都、その他の綿糸紡績女工	昭和2年
	(H) 総同盟組合員女工	昭和3年頃
	(I) 神戸市のマッチ工業従事女工	昭和3年
	(J) 総同盟紡績沼津支部の組合員女工	昭和7年頃
職業婦人	(K) 東京市内の職業婦人	大正11年
	(L) 名古屋市内の職業婦人	大正13年
	(M) 広島市内の職業婦人	大正15年
	(N) 京都市内の職業婦人	大正15年
	(O) 大阪市内のカフェー女給	昭和5年
	(P) 東京府の百貨店就職希望女性	昭和6年
	(Q) 東京市内百貨店等の婦人従業員	昭和9年
女学生	(R) 東京の某高等女学生	大正3年頃
	(S) 東京の某高等女本科3・4年生	大正3年頃
	(T) 東京府立第五高等女学生徒	昭和6年
(U) 東京府立第三高等女学生徒	昭和7年頃	
女子小学生	(V) 東京市内の45小学校の尋常4・5・6年生	大正14年
	(W) 京都市内の17小学校の生徒	大正15年

資料：氷嶺(1997, 161頁)の表5・1より作成。

### 3 分析の視角と方法

#### 1) 分析の方法

本稿では、『少女の友』の掲載小説について、そこで語られている少女像の変遷を、数量的な分析によってつかむ。そして、それに加え、質的な分析によって、それをよりくわしくみていくことにする。

分析の素材は、明治41年（1908年）2月に創刊し昭和30年（1955年）6月に廃刊した、実業之日本社刊の『少女の友』である。『少女の友』を選んだのは、一つめに、他の少女雑誌にくらべてもっとも長く続いた雑誌だからである。二つめに、大正12年（1923年）の創刊から圧倒的な少女たちの支持を得た『少女倶楽部』にはかなわなかったものの、『少女の友』は『少女倶楽部』とは異なる読者層を獲得し、常に購読者数の多い雑誌であったからである。三つめに、『少女の友』が意識的に東京や京阪神の新中間層の少女たちに向けて誌面づくりをしていたからである。新中間層は近代家族をいちやく実態化した階層である。本稿の目的は、その近代家族の少女たちが受けとっていた表象を分析することにあるため、少女雑誌のなかでも、よりその傾向が強い『少女の友』を選んだのである。

また、近代の少女雑誌は小説が誌面の大半を占めるという性格であったため、分析するのは『少女の友』の掲載小説ということになる。掲載小説は、大部分、毎号、一回完結の読みきりのかたちをとっている。ただ、競争誌の『少女倶楽部』が連載小説を売りものにしてきたことから、それにならい、『少女の友』にも昭和のはじめごろから連載小説が多く掲載されるようになっていく。しかし、このうち、大型の連載は単行本となることが多く、また、川端康成などの有名な作家の連載であることが多いため、現在、復刻、あるいは全集本に収められ、容易に手に入るものも多々ある。随時、それらを補足というかたちで、みていくことにしたい。

分析する時期は、創刊の明治41年（1908年）から敗戦の昭和20年（1945年）までである。敗戦後、それまでの価値がくつがえされ、『少女の友』もその様相をがらりと変えてしまうことは予想されることであり、それを分析することはたいへん意義のあることであると思われるが、ここでは、「近代の少女像」を分析するということで、敗戦後の分析はおこなわない。この明治41年（1908年）から敗戦の昭和20年（1945年）までの期間、毎年、原則的に1月号と8月号を、分析することにする。これは、1月号が、連載小説の開始の号であること、また、編集側も新しい年の編集方針を誌上に発表する号であることから、その年の『少女の友』の色をもっともよくあらわす号だといえるからである。それから、8月号は、ほぼ一年間のうちで中間の号に位置し、かつ、入手したなかでもっとも欠号の少ない号であったからである。また、『少女の友』は、大阪国際児童文学館に所蔵されているものを分析の対象としており、ここが、日本中ではもっとも『少女の友』を多く所蔵しているところである。しかし、それでも、欠号が多くある。分析対象である号に欠号がある場合、その年に発行された別の月の号を扱っている。しかし、残念ながら、その年すべての号が欠けていてそれすらできなかつた年もあったことを、ことわっておきたい（くわしくは本稿末の資料を参照されたい）。

#### 2) 数量的分析の枠組み

本稿では、まず、『少女の友』の掲載小説のなかで語られている少女が、どのような語られ方をしているか、その語られ方によって、本稿で分析対象となった掲載小説すべてを分類していく

という数量的な分析をおこなっていくことにした。その分類の枠組みについて、ここでは、説明しておきたい。

牟田和恵によると、明治30年代以降に求められた良妻賢母女性は、封建期女性の回帰といえるが、しかし、封建期女性と異なり、「必ずしも劣ったあるいは柔弱な存在であるべきではなく、教育と自主性が求められ」（牟田 1996, 69頁）る女性像である、という。そして、それは、「男児を育てる母」の役割に必須とされる（牟田 1996, 69頁）。封建期女性が、自己よりも家族を優先する家族主義的な志向をもち、家族の言うがままに行動する無知で無力な自主性をもたない存在であるのに対し、明治30年代以降の良妻賢母女性は、その封建期女性が内包している家族主義を残しつつ、また、それを延長させた概念としての国家主義をもちつつ、教育と自主性を新しく付与した存在だといえよう。

表1-3 少女像を抽出する基準

個人主義	家族や国家、地域社会よりも、自分の利益を優先させる 自分の利益を追求したり、自分の利益のために行動している あるいはそのような志向をもつ
家族・ 国家主義	自分の利益よりも家族や国家、地域社会の利益を優先させる 家族や国家、地域社会のために、自分を犠牲にする行動をとる あるいはそのような志向をもつ
自主性	知識や能力をいかし、自分の行動を決定する あるいは実際に決定していなくてもそのような志向をもつ
非自主性	家族や国家、地域社会に自分の行動の決定をゆだねる あるいは実際に決定をゆだねていなくてもそのような志向をもつ

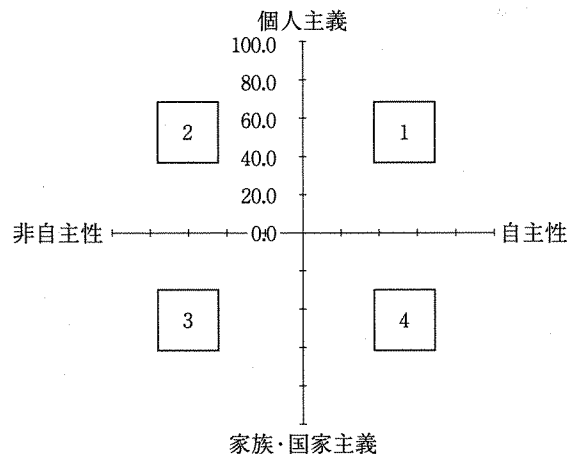


図1-2 少女像を抽出する枠組み

そこで、図1-2のように数量化の枠組みを設定した。このような、「個人主義」対「家族・国家主義」の縦軸と、「自主性」対「非自主性」の横軸を設定し、それをもとにして、『少女の友』記載小説の少女の語られ方をみていくことにした。この枠組みは、「個人主義」対「家族主

義」の縦軸と、「性分業肯定」対「性分業否定」の横軸を設定して『主婦の友』と『婦人公論』の分析をおこなった木村涼子の数量化の枠組みを参考にしている(木村 1989,13頁)。なお、ここでは、この4つの志向性を表1-3のように定義している。「個人主義」とは、家族や国家、地域社会などの集団の利益よりも、自分の利益を優先、追及していく志向とする。そして、「家族・国家主義」とは、自分の利益よりも、家族や国家、地域社会などの集団の利益を優先し、自分の利益を犠牲にしていく志向とする。これは、徳川時代の武士階級の家族道徳であった儒教にみられる志向であり、また、明治政府が「家族制度イデオロギー」として民法、学校教育をつうじて普及させた志向である(川島 2000,150-153頁)。さらに、それを国家にまで拡大した家族国家観にみられる志向でもある(川島 2000)。すなわち、徳川時代の武士階級にみられる女性像、そして、近代の国家政策、女子教育論にみられる良妻賢母像が内包する志向である。これを、『少女の友』の掲載小説にあらわれた少女の志向性を分類する際、より単純化し、少女が小説のなかで自分の利益を重視しているのか、あるいは、家族・国家・地域社会の利益を重視しているのか、そのどちらかによって、あるいはどちらの志向性もある場合はそのどちらの志向性がより強いのかによって、『少女の友』の掲載小説を分類していくことにする。また、「自主性」とは、知識や能力、行動力をいかして自分の行動を自分で決定していく志向とする。そして、「非自主性」とは、家族や国家、地域社会などの集団に自分の行動の決定をゆだねる志向とする。三従の教えに代表されるような「女には自らの力で考え、ものごとに対処していく力は不必要」(小山 1991,22頁)とする封建期に特徴的な女性観がもつ志向である。これを、『少女の友』の掲載小説にあらわれた少女の志向性を分類する際、より単純化し、小説のなかで、少女が自分の行動を決定する際、自分自身で決定し行動しているのか(しようとしているのか)、あるいは、家族・国家・地域社会が決定しそれにしたがっているのか(したがおうとしているのか)、そのどちらによって、あるいはどちらの志向性もある場合はそのどちらの志向性がより強いのかによって、『少女の友』の掲載小説を分類していくことにする。

さらに、この図1-2の基本軸において、図1-2の1の「個人主義」であり「自主性」をもつのは「自己実現タイプ」、図1-2の「個人主義」であり「非自主性」であるのは、個人の欲求のままに行動しているがあくまでも親などの保護、管理の必要な「幼児タイプ」、図1-2の3の「家族・国家主義」であり「非自主性」であるのは「封建期女性タイプ」、図1-2の4の「家族・国家主義」であり「自主性」をもつのは「良妻賢母タイプ」、ということができる。

### 3) 分析の手続き

このような数量的な枠組みをもとにして、『少女の友』掲載小説にあらわれた少女が「個人主義」の志向をもつのかあるいは「家族・国家主義」の志向をもつのか、それに加えて、「自主性」があるのか「非自主性」なのか、その志向性に着目し、分析の対象とした『少女の友』の掲載小説を分類していくことにする。そのとき、小説のなかで、その心性やふるまいをことこまかく描写されている少女についてみていくことにするが、そのような少女が一つの小説のなかに複数登場する場合、それぞれに着目していくことにする。

分類したのち、大まかな傾向をつかむため、『少女の友』の雑誌づくりの変遷にそって時期区分を設定し、その時期区分ごとに数量的な把握をおこなう。『少女の友』は、先にも述べたように、編集者が編集だけでなく創作にもあたっていたため、編集者、特に主筆の意向が誌面に反映されやすい。主筆の交代は、実業之日本社社長、増田義一の意向にすべてゆだねられており、そ

れは、『少女の友』を売るための経営戦略に密接にかかわるものであった。そのため、主筆の交代のたび、『少女の友』の誌面が大きく変わることが予想される。そこで、第1節で述べた主筆の変遷と、それから、それにかかわる経営戦略上の雑誌づくりの変遷から、5つの時期区分を設定した。

まず、①明治後期・明治41～45年（1908～1912年）の前・星野水裏時代である。それから、女子教育家の下田歌子の影響が大きくなる②大正前期・大正2～8年（1913～1919年）の後・星野水裏時代、③大正後期・大正9～15年（1920～1926年）の岩下小葉（そして浅原鏡村）時代、そして、内山基が入社して映画や宝塚少女歌劇の記事を掲載しはじめる④昭和初期・昭和2～14年（1927～1939年）の岩下小葉・内山基の時代、最後に、戦時体制における記事検閲下の⑤戦時下・昭和15～20年（1940～1945年）の時代である。

このような時期区分ごとに、『少女の友』掲載小説を分類した結果を数量的に把握し、大まかな傾向をつかみたい。しかし、もちろん、それはあくまで時代ごとの少女像の大まかな傾向をつかむためのものであるため、それだけでは不十分である。そこで、そのように分類された少女像について、ストーリー構成上、それがどのようなストーリーのなかで語られているのか、また、どのような意味づけを与えられているのか、質的にさらにくわしくみていくことにする。

## 第2章 無知で無力な少女：明治後期・明治41～45年（1908～1912年）

### 1 数量的分析の結果

図1-2の枠組みをもとに、『少女の友』の少女像の分類を試みた結果、図2-1、図2-2のような結果が得られた。図2-1は、明治41年（1908年）から昭和20年（1945年）までの『少女の友』における「個人主義」、「家族・国家主義」、「自主性」、「非自主性」の志向をもつ少女像の出現頻度を示している。図2-2は、図1-2の枠組みをもとに、明治41年（1908年）から昭和20年（1945年）までの『少女の友』における「自己実現タイプ」、「良妻最賢母タイプ」、「封建期女性タイプ」、「幼児タイプ」の少女像の出現頻度を示している。

この数量的分析の結果をもとに、それぞれの時期区分でみられた少女の語られ方の特徴について、質的分析の結果を加えながら、述べていきたい。

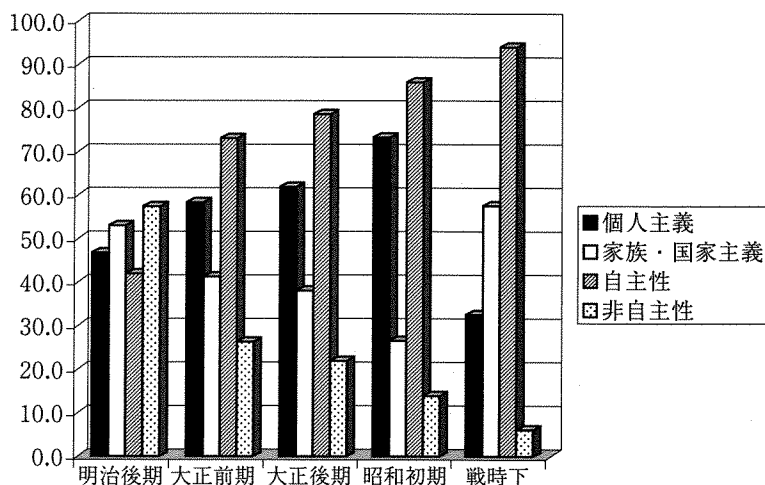


図2-1 『少女の友』にあらわれた少女の志向性の推移

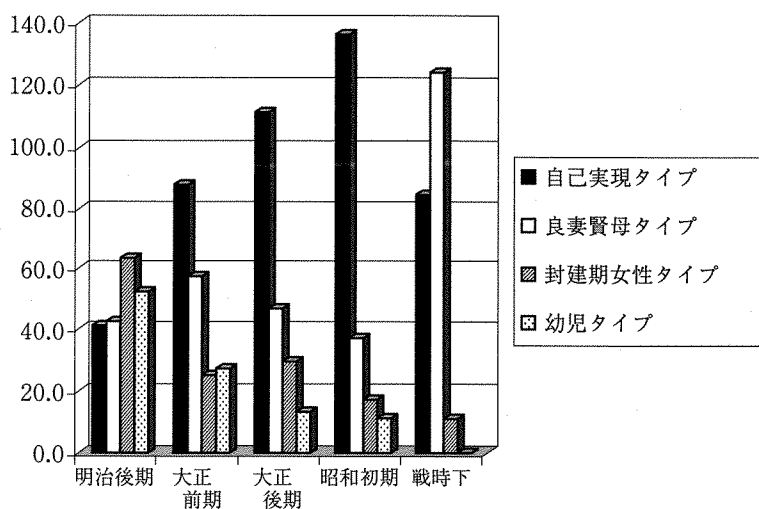


図2-2 『少女の友』にあらわれた少女像の推移

表2-1 『少女の友』にあらわれた少女の志向性の推移

	明治後期	大正前期	大正後期	昭和初期	戦時下
個人主義	47.1	58.3	61.8	73.4	32.4
家族・国家主義	52.9	41.7	38.2	26.6	67.6
自主性	42.2	73.0	78.7	86.0	94.1
非自主性	57.8	27.0	21.3	14.0	5.9
合計	200.0	200.0	200.0	200.0	200.0

表2-2 『少女の友』にあらわれた少女像の推移

	明治後期	大正前期	大正後期	昭和初期	戦時下
自己実現タイプ	41.2	88.7	110.6	135.9	64.7
良妻賢母タイプ	43.1	57.4	46.9	36.2	123.5
封建期女性タイプ	62.7	26.1	29.1	16.7	11.8
幼児タイプ	57.8	27.8	13.4	11.1	0.0
合計	200.0	200.0	200.0	200.0	200.0

## 2 創刊のころの『少女の友』

本田和子は、明治19年（1886年）の中学校令公布と、明治32年（1899年）の高等女学校令公布は、男女に「別々の意味づけが試みられた」ことを意味し、その意味では、きわめて「近代化への操作」の色合いの濃いものであったとしている（本田 1990, 180頁）。そして、その後にいっせいに創刊された少年雑誌群と少女雑誌群は、それを補充すべく機能したと論じている（本田 1990）。また、久米依子は、明治30年代以降、それまでの「女子」に代わり、「少女」という呼称が一般化したことをふまえ、単純な対の性別表記である「女子」「男子」に代わって、それまで年少者全体をあらわしていた「少年」から「少女」を分離させて誕生したこの「少年」「少女」の区分は、「権力的な差異を示す記号」（久米 1997, 195頁）であるとしている。

このように、「少女」という呼称、そしてその意味づけが定まったのち、明治41年（1908年）2月11日、実業之日本社から「少女」を冠した少女雑誌、『少女の友』が創刊される。主筆は星野水裏。星野は、表紙絵や挿絵に関してこまかい注文をつけ、さらに、小説の原稿についても、内容はもちろん、表現や字句に至るまで、不適當と思うものはすべて筋や用語を改めさせた。たとえば、妾、芸者、継母、尻などの文字の使用を一切禁じたのである（星野水裏「編集しながら」大正4年秋の増刊号）。

『少女の友』創刊号の星野による発刊の辞はこうである。

少女の時代ほど愛らしくもあり、また恐ろしきものはありません。如何なる色にでもすぐに染まり易く、また一たび染つた悪習慣は容易に直すことが出来ません。それが為に、いつしか悪い友達と交つて悪い習慣を作り、親の言ふ事を聴かず、先生の教にも従はず、他人に嫌はれ笑はれるやうな娘になつて、遂に一生を過つ者が少なくありません。此悪い習慣を防ぐには学校と家庭との外に、少女に取りて面白く有益な読み物が必要であります。然るに、かやうな良い読み物はまだ我国にはありません。依て我社は最良の婦人雑誌『婦人世界』の妹雑誌として、少女の為に、面白く、且有益なる『少女の友』を発行するに至りました。此「友」こそ実に少女を導いて、やさしく、うるはしく、人に敬愛せらるる婦人となるに無二の師友であると信じます。

星野が、『少女の友』を、教育的な配慮をもって作りあげようとしていた態度が、ここにもよみとれる。それも、少女に対し、教養を身につけさせるというよりは、「親の言ふ事を聴くことや「先生の教に」したがう「習慣」を身につけさせることを目指している。一方、少年雑誌『少年園』（明治21年創刊）は、その広告にて、「此の少年園は自ら任じて日本少年の進路を示さんとする者にして、完全なる教育を以て目的とせり。故に少年園は徳育を以て其根柢とし、智育を以て其花実とし、体育を以て其材幹とす」と少年の教育を目指していたが、その教育のなかみ

は「刻苦勉励して功成り名を挙げることを、さらには国家有為の人材となることをねらいとして」いたという（大阪国際児童文学館 1993, 567頁）。すなわち、この時代、少年雑誌と少女雑誌、さらには「少年」と「少女」は、まったく意味合いの異なるものだったのである。

さらに、星野は、「五年間の少女の友の歴史」（大正2年3月春の増刊号）で、これまでの『少女の友』の編集についてふり返り、「少女の友の主義精神、それは何であつたかと云ふに家族的博愛主義、即ち少女の友は一の大なる家庭であつて、記者及び読者は其家族である、一家の家族が互に愛し合つて親密なる如く、我々もさうせねばならぬ、といふ此家族的親愛主義を鼓吹するにあつたのである。……これが為に我等は、徒に読者におもねつて、読者の意向にのみ従ふという事はなさなかつた。或時は愛撫もし、或時は訓戒もした」と、述べている。このような「家族親愛主義」の直接的な交流のかたちとして、このころ、各地で愛読者大会、誌友会をたびたび開催して星野自身も出席し、編集者と読者との交流をはかった。また、間接的な交流として、誌面に、読者の手紙形式の投書を書ける投書欄、それから、読者の作文や詩などを載せる投稿欄を設けて、読者の誌面参加がうながされた。今日の投書といえは、不特定多数の読者に宛てて自分の意見を述べるようなかたちのものであるが、このころの女性雑誌や子ども向け雑誌の投書は、編集者個人や読者個人などの、特定の人物に宛てた私的な内容のものがほとんどであった。『少女の友』も、この例にもれず、『少女の友』の常連の投稿者や編集者に宛てた私信が、投書欄には数多くみられた。

それから、このころの掲載小説は、編集者が執筆することが多く、星野自身も、いくつもの変名で小説を載せていた（大阪国際児童文学館 1993）。編集者以外からは、与謝野晶子が童話、尾島菊子が少女小説を寄稿している。また、『少女の友』の売り物の1つであったのが、竹久夢二の表紙絵、挿絵である。夢二は、小説もいくつか載せている。それから、このころの大きな特徴は、女子高等師範学校教授宮川壽子「自分が貰つた贈物を貧児に別けてやつた感心な少女」（明治42年10月号）、神奈川県立高等女学校囑託門奈くり子「卒業するまで金銭の出入帳をつけてゐた生徒」（明治43年2月号）などの美談が頻繁に載せられていることである。

それでは、星野の教育的な意図の色濃かった創刊のころの『少女の友』は、いったい、少女をどのようなものとして語っていたのであろうか。

### 3 無知で無力な少女像

明治41年（1908年）の創刊から明治45年（1912年）まで、『少女の友』で語られていた少女像を、二つの基本軸（図1-2）によってあらわすと、図2-3のようになる。すべてにおいてきわだった偏りはない。創刊のころはまだはっきりとした少女像が確立していないようである。ただ、図2-1、図2-2から、この時代の特徴をみると、「非自主性」と「家族・国家主義」の志向をもつ「封建期女性タイプ」と、「非自主性」と「個人主義」の志向をもつ「幼児タイプ」の出現頻度がきわめて高いことがわかる。

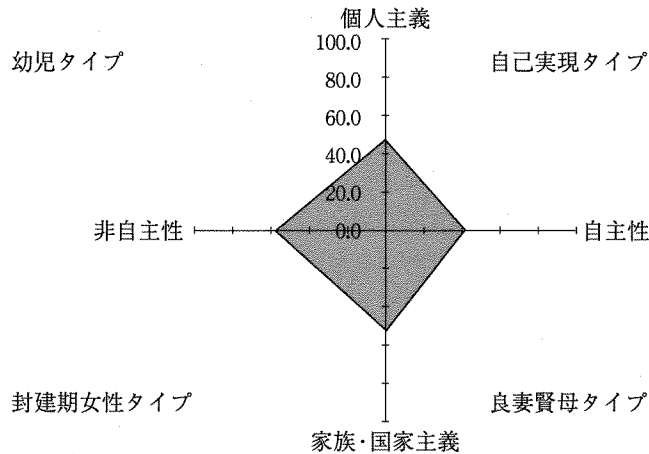


図2-3 明治後期：『少女の友』の少女像

質的に分析してみると、『少女の友』では、二つの少女像が語られる傾向にあった。まず、①どのような親であろうとひたすら盲目的にしたがう孝行娘(「封建期女性タイプ」)、それから、②母親の監督と指導を常に必要とするようなあどけない少女(「幼児タイプ」)である。この時代に数量的にみられる「自己実現タイプ」と「良妻賢母タイプ」は、質的にみると、否定的に語られた少女像にすぎない。

ところで、この明治40年代、女子教育論のなかで掲げられていた理想的な女性像は、いったいどのようなものだったのだろうか。小山静子によれば、日清戦争後の明治28年(1895年)ごろから、江戸時代の女訓書が理想化した女性像、すなわち、「女を男に比べて愚かなものとし、劣等視する価値観のもとで、夫や舅姑に対して従順な妻や嫁となる」女性像に代わり、「まず子どもを育て、教育する母役割が、やがては家事を責任をもって遂行する妻役割が強調され、そのため女子教育の充実が主張されていた」という(小山 1991, 234頁)。そして、これは、「近代国家の建設、それを支えていく国民の養成が国家的課題として登場してくる」ためであった(小山 1991, 234頁)。また、牟田和恵は、国家的な課題として女性の母役割を重視する見方の登場から、女性に対し、「教育と自主性が求められる」ようになったとしている(牟田 1996, 69頁)。このような女子教育論が掲げていた良妻賢母象につながるような、「教育と自主性」(牟田 1996, 69頁)は、『少女の友』の少女像には、みられない。むしろ、①の「封建期女性タイプ」も、②の「幼児タイプ」も、教養や自主性のない無知で無力なものであるという意味において、江戸時代の女訓書にみられるような、女性を劣等視し、「自らの力で考え、ものごとに対処していく力は不必要、いやそれどころか期待しえない」(小山 1991, 22頁)とするような女性像につながるものといえよう。小山は、このころの「女子教育振興の文脈で語られる良妻賢母思想がもっていた現状打破的な性格は、現実の教育にはそれほど貫徹していなかった」(小山 1991, 59頁)と指摘しているが、『少女の友』においても、良妻賢母像というよりは江戸の女訓書の語る旧来の女性像が理想化されているといえる。

たとえば、①どのような親であろうともひたすら盲目的にしたがう孝行娘(「封建期女性タイプ」)は、大酒を飲んであたりちらす両親にも文句一つ言わずにつくす(渡邊白水「不具の両親を助けて家を再興した孝女おとらの美談」明治41年12月号)、冷たくふるまう病気の母親に畳にひたいをこすりつけて看病させてくれと懇願する(尾島菊子「なさぬ仲」明治44年8月号)、父親

の犯した罪の許しを乞うため自ら命を絶つ(牧山眞竹「山賊の娘」明治41年10月号)などの小説にあらわれている。そこには、常識外れの無理難題を言う親にも、愛情のない親にも、黙ってしたがう従順な少女の姿が語られている。また、親のために自ら命を絶つなど、その孝行の内容も想像を絶するような内容が多い。

また、②母親の監督と指導を常に必要とするようなあどけない少女(「幼児タイプ」)は、たとえば、母親の真似をして裁縫をしたがる娘に、望むどおりのことをしてやるもののそれが限度を越えようと厳しく叱りつけ、娘はそれに絶対的にしたがう(高信峽水「光ちゃんのお裁縫」明治41年10月号)、紅葉狩りへ行ったが「叱られませんか」と絶えず母親の許しを得てから紅葉を拾う(与謝野晶子「紅葉の子」明治42年11月号)、母親にねだって袴を着せてもらう(岩下小葉「お袴」明治44年1月号)などの小説にあらわれている。そこで語られている少女は、母親の意向に沿うかたちでのみ慈しまれ可愛がられて気ままなふるまいが許されるものの、ひとたび母親の意向にそぐわないふるまいをすると母親にたしなめられ、絶対的な服従を強いられる。そのため、少女は、どんなときにも母親の意向をうかがい、母親の指導をあおぎ、それに盲従しようとしている。また、気ままなふるまいをするにしても、必ず、母親の忠告や援助がなければそれはかなわない。まさに、保護と監督の必要な、あまりにも幼くあどけない少女の姿が示されているのである<sup>1)</sup>。

そして、そのように、少女は無知で無力なものであるという前提があるため、この時代の『少女の友』では、少女に対し、あらゆる徳目を繰り返し教え込もうとしている。先にも述べた美談ものが頻繁に載せられていること、また、小説においても、あらゆる徳目がふんだんに盛り込んであることが、それである。たとえば、与謝野晶子は、女性の自立と自我の解放をとらえた女性解放思想の先駆者であるが、『少女の友』においてその先駆的な視点はみられず、「いくら悪口をいはれたつて、自分が善いことをばかりして居れば、神様は大切に下さいます」(「蓮と花と子供」明治43年8月号)というような徳目を強調する童話を頻繁に載せている。そして、ここでみられる徳目は、質素である、慈悲深い、正直である、貞操を守る、などのような徳目にかざられ、女学校や女子高等師範学校、女子商業学校の教師が美談の多くを手がけているにもかかわらず、学業に励むことを強調するものはほとんどみられない。

### 第3章 家族への愛情のために自己を捧げる少女：大正前期・大正2～8年(1911～1920年)

#### 1 下田歌子と『少女の友』

大正に入ると、西欧社会からデモクラシー思想が流入して、政治、労働、文芸、教育などの各方面に少なからぬ影響を与えるようになる。明治44年(1911年)9月に平塚らいてふとその仲間たちが、『青鞥』を創刊し、その創刊の辞の、「元始、女性は太陽であった。真正の人であった。今、女性は月である。他に依って生き、他の光によって輝く、病人のやうな蒼白い顔の月である」、にみられるように、他に依存して生きていた女性たちに、内なる太陽を取り戻して輝け、と、叱咤激励した。一方、地方の保守的な人々、特に謙讓貞淑な儒教的女徳を学んだ下田歌子や鳩山春子などの女子教育者たちは、マスコミが「新しい女」と揶揄した報道のせいもあって、『青鞥』の関係者を危険思想の持ち主と攻撃した(秋枝 1995)。

『少女の友』では、明治43年(1910年)ごろから下田歌子が随筆を載せていたが、大正に入ると、ほぼ毎号、随筆や訓戒を載せるようになっていく。『青鞥』を批判する下田歌子を頻繁に起

用するようになったということは、『青鞥』とそれに関する新しい女性の運動に、『少女の友』は批判的な立場をとっていたと考えてもいい。大正4年(1915年)には、下田は、「少女家事十二ヶ月」と題し、毎月、行儀作法に関する文章を載せている。そのなかでは、言語動作をしとやかにして音をたてないようにする、話題は愚痴や批評を避け、話し方にも気をつけ、「生意気らしかつたり、意張つてるやう」に聞こえないように気をつける、などを、こまかく記したり(「お客に行つた時」大正4年1月号)、また、女性は決して口いっぱいに向けて笑うな、といさめたりしている(「口!口!口!」大正4年8月号)。ここでは、謙譲貞淑な儒教的な女徳を身につけた女性の育成が目指されているといえよう。

星野水裏も、「少女というものはひねくれて居てはいけぬ。素直でなければならぬ。下品ではいけない、上品でなければならぬ。常に、清く美しく尊く、すべてに於いて愛らしくなければならぬ」(「五年間の少女の友の歴史」大正2年春の増刊号)と、述べている。また、大正に入ると、竹久夢二から川端龍子へと『少女の友』の表紙の描き手を交代させているが、星野は、龍子に対し、「贅沢な模様と色彩とを施してある」ために「縮緬の着物」を描くことを禁止し、少女の着物はあくまで銘仙までにとどめ、袖の長さも1尺八寸までにする、それから、「リボンなども馬鹿馬鹿しく大きいものはよして、淑女の美観を傷けない程度のものに」し、「数に於てもなるべく一つといふことに」する、派手できらびやかな色彩と模様のちりめん着物よりも、「中流の健実な家庭の少女が着てゐる二円か三円の」着物のほうがふさわしい、とこまかな注文をつけた(大正5年1月号)。川端龍子は革新の日本画家といわれ、ときには全長5メートルにも及びダイナミックな作品で「会場芸術」と呼ばれる芸術活動を展開し、作家の佐藤春夫に絶賛された画家であるが、『少女の友』に描かれた龍子の少女にそのダイナミックさはない。

それから、大正に入ると、美談ものがほとんど掲載されなくなり、『少女の友』は、ますます小説中心の誌面になっていく。このころ寄稿していたのは、山田邦子、池田みすず、などの少女小説の書き手たちであり、やがて、それに、江見水蔭、今西吉雄らの講談、三津木春影、森下雨村などの推理物語が、加わるようになる。また、星野は、才能があると認めた新人の発掘・育成にもつとめ、当時早稲田大学の学生であった宇野浩二に、童話、少女小説などをかかせたのも彼である。(実業之日本社社史編纂委員会 1997)。

ところで、明治44年(1911年)からは、成績優秀な継続投稿者への懐中(のちに腕)時計贈呈制度を設け、読者からの作文や詩などの投稿を奨励した。そうして、これは太平洋戦争末の戦況悪化時までつづいたのである(大阪国際児童文学館 1993)。

この時代の『少女の友』における小説の特徴をひとことで言うならば、「悲劇」である。この時代、『少女の友』では、悲劇小説が流行し、信じられないような悲惨な小説ばかりが誌面をおおいつくすようになる。以下、具体的にみていく。

## 2 家族への愛情のために自己を捧げる少女像

大正になると『少女の友』の少女像に明確な偏りがあらわれる。図3-1をみてみよう。明治後期とくらべ、「自主性」を志向する少女が増えるとともに、「自主性」と「家族・国家主義」を志向する「良妻賢母型タイプ」と、「自主性」と「個人主義」を志向する「自己実現タイプ」に、少女像が真っ二つにわかれている。

大正に入るところから、女性解放思想の登場に象徴されるように、女性の置かれている状況が「問題」としてとらえられ、「婦人問題」が社会問題として人々の間に認識されるようになる

(小山 1991)。それに対応するように、『少女の友』でも、悲劇的な小説が流行し、質的にみると、悲惨な境遇に疑問をもち、自由と自己実現を求めて苦悶する少女が、悲劇的な調子で、繰り返し語られるようになっていく。明治後期は何に対しても無批判である無知・無力な少女が語られていたことを考えると大きな変化であり、ここに来て、『少女の友』でも、少女たちの置かれている境遇を問題視する見方が誕生したのだと考えられる。しかし、このような悲劇的な小説においても、二つの少女像が語られる傾向にあった。まず①家族（特に親）によって自由と自己実現が妨げられている場合、少女はそれらへの欲求をもちながらも、結局、家族（特に母親）の自分への愛情に気づき、それに応えようとして自ら自由と自己実現への欲求を抑えつける（家族志向の「良妻賢母タイプ」）。それから、②家族（特に親）が登場しない場合、かつ、家族（特に親）以外によって自由と自己実現が妨げられている場合にかぎり、少女は自由と自己実現への欲求をもちつづけ、それをかなえようと苦悶しつづける（「自己実現タイプ」）。数量的にあらわされた二つの少女像は、質的にみるとこのようなかたちで語られているのであった。

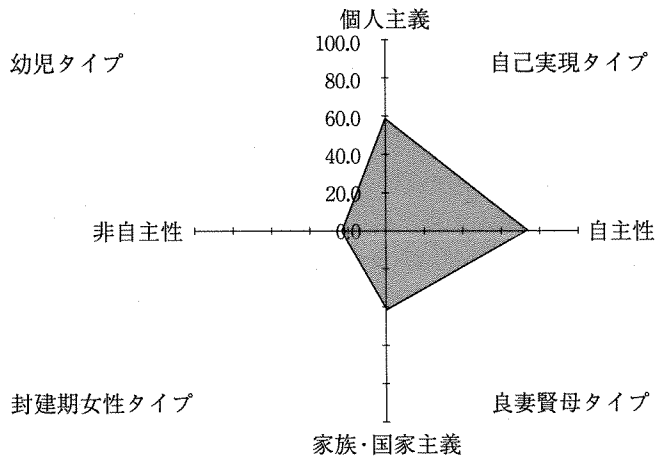


図3-1 大正前期：『少女の友』の少女像

たとえば、①の家族志向の「良妻賢母タイプ」は、山のなかで病気の母親の看病をしている娘が、夢と向上心に燃えて山の向こうへ行くことを決意するが、母親の自分への愛情に気づいて踏みとどまる（山田邦子「あの山を越えて」大正2年1月号）、父緒が死んで家計が苦しくなったため、6人の息子がいるなか娘だけが叔父の家にひきとられることになり、娘は嘆き苦しむものの、母親と兄、弟の愛情に気づき、それにしがうことにする（江口千代「冬の来る頃」大正6年1月号）、病気の姉の看病から逃れたいと思いつつも、姉の感謝にむせび泣くさまに心打たれ、妹は一生姉の看病をしていくことを誓う（菅野菊枝「春にあへる人々」大正6年1月号）などの小説にあらわれている。このように、少女は、最初こそ、家族（特に親）によってもたらされた自分の悲惨な境遇に疑問を抱き、自由と自己実現を求めるものの、家族（特に母親）の自分への愛情に気づき、結局、自由と自己実現をあきらめ、家族のために犠牲になることを決意している。

また、②の「自己実現する少女」は、たとえば、孤児院の少女が、使用人をこき使うことで有名な人物のもとへ女中としてひきとられそうになるものの、「私は自分独りで一人前の立派な女にならなければならぬ」と抵抗し、東京へ逃げる（岩下小葉「みなし児」大正3年1月号、8月

号), 人身売買で娘曲芸団に売られた少女が自由を求めて苦悶する(江見水蔭「飛ぶ少女」大正2年1月号)などの小説にあらわれている。このように, 少女たちは, 自由と自己実現を阻害するものに対し, 嘆き, もがき苦しんでいるのである。

すでに述べたように, 同じころ, 女子教育論のなかで, 子供の育成・教育のための母役割, 家事を責任もっておこなう妻役割が求められ, そのための教養と自主性がある良妻賢母像が登場していたが(牟田 1996), 『少女の友』において, ①の自由と自己実現を放棄して家族につくす「良妻賢母タイプ」は, 盲目的にではなく一定の自主性をもって親ひいては家族のためにつくしているという意味において, このころの女子教育論の掲げる良妻賢母像につながるような少女像であるといえる。しかし, 少女が自由と自己実現への欲求をもっているものとして語られているという意味において, その少女像は, 女子教育論の良妻賢母像にはみられない少女像をも内包しているといえよう。そして, それをおすすめたのが, ②の自己実現をもちつづける少女像, といえるのである。

## 第4章 自己と家族の間で葛藤する少女：大正後期・大正9～15年(1920～1932年)

### 1 第一次世界大戦後の『少女の友』

大正8年(1919年)ごろ, 「職業婦人」という言葉が社会に浸透するようになる。女性の職業への進出がすすみ, 「大正期には女が職につくのを異常だとか女らしくないという非難は影をひそめ, 婦人雑誌が女子の職業案内を特集するように, 女の職業進出を新時代の特徴とみなすようになった」(村上 1983, 71頁)という。職業婦人の増加とともに, 全国タイピスト組合, 婦人事務員協会, 大阪女給同盟などの組織も, 誕生している。

また, 女性の進学熱も高まり, 女子の高等女学校在学者数は明治43年(1910年)から大正9年(1920年)の10年間の間に約2.3倍になり, 大正15年(1926年)までの16年間では6倍近くにもなっている。大正9年(1920年)には東京帝国大学で女子の聴講生を許可, まもなく, 京都帝国大学でも許可される。大正13年(1924年)には, 日大, 早大などの女子聴講生, 女子学生連盟が結成され, のちに, 同志社大, 関西大なども加わり規模が拡大した。この連盟は, 女子教育の向上と機会の平等を目指すものであった。

『少女の友』は, 大正8年(1919年)から, 星野水裏から岩下小葉へ主筆が代わる。同じころ, 競争誌の創刊が相次ぎ, なかでも, 大正12年(1925年)創刊の『少女倶楽部』は急速に広範囲な読者を獲得していったため, 『少女の友』も星野の時代のままの内容ではいられなくなる。『少女の友』の愛読者から投稿家, そして『朝日新聞』の懸賞小説に一等当選して作家になった横山美智子が登場するのはこのころである。

このように女性の状況と, 社会の女性に対する期待が急激に変化し, しかも, 競争誌『少女倶楽部』が登場して今までの誌面づくりへの再考を迫られるなか, 『少女の友』は, どのような誌面を展開することになったのだろうか。

### 2 自己と家族の間で葛藤する少女像

大正7年(1918年)第一次世界大戦終結後, 女子教育論において, 良妻賢母像の劇的な変化がみられるという(小山 1991)。第一次世界大戦下の西欧女性の統後のはたらきは, 日本のジャーナリズムを賑わしただけではなく, 文部省や軍部も注目したため, 「一方では潜在能力を開発し, 活動力や積極性をそなえた女性を育成していくことを目指し, 他方では従来の性別役割

分業を温存しつつ、女性の『男性化』を避ける、という課題の追求され」ようになる（小山 1991, 235頁）。そのため、これまでのように家内労働だけに従事するのではなく、職業の従事や「女の特性」の発揮などをつうじた国家への直接的な貢献をもする新しい良妻賢母像が求められるようになったという（小山 1991）。しかし、『少女の友』では、数量的にみると、明確な変化はない。わずかに、大正前期よりも、「自主性」と「個人主義」の志向をもつ「自己実現タイプ」が増えているのみである。図4-1をみてもらいたい。

しかし、質的にみると、大きな変化がみられる。このころ、大正前期同様、二つの少女像が語られる傾向にあるが、それらは大正前期のものとは大きく異なっている。まず、一つめは、①自分の才智や行動力をいかして家族（特に親）のためにはたらく少女（家族志向の「良妻賢母タイプ」）である。これは、大正前期の①「良妻賢母タイプ」の発展したものと理解できる。それから、二つめは、②家族の反対に苦しみながらも自分の才智や行動力をいかして自由と自己実現をかなえようとする少女（「自己実現タイプ」）である。この二つのタイプの少女像がみられるようになった。そして、この二つの少女像は、自主性をもち、教養と行動力、積極性をもつという意味では共通し、今までになかった新しいタイプの少女像である。その意味においては、両方とも、この時代にみられる、西欧女性のような教養や行動力、積極的性を社会的な規模で日本女性にも求める動きに対応しているといえよう。

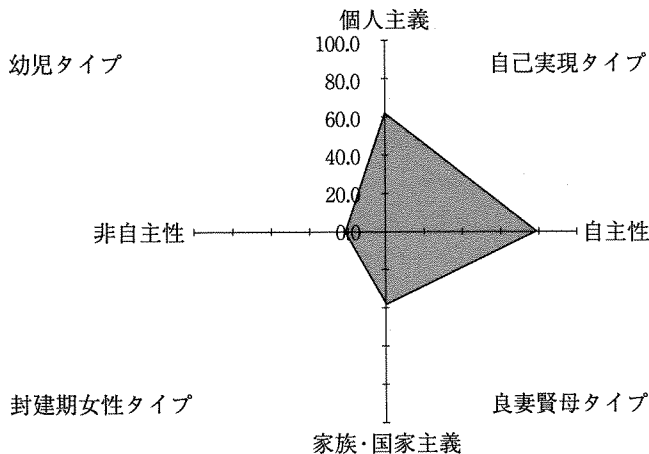


図4-1 大正後期：『少女の友』の少女像

しかも、①自分の才智や行動力をいかして家族のために積極的にはたらく少女（家族志向の「良妻賢母タイプ」）がおこなうのは、家内労働ではなく、企業や工場などではたらくという賃労働である。先に述べたように、このころ、女性に対し、家内労働だけでなく、職業の従事や「女の特性」の発揮などをつうじた国家への貢献をすることが求められていたが（小山 1991）、まさに、この少女像にみられる職業への従事は、それに見事に対応している。ただし、女子教育論で妻や母である女性たちに対していわれているのは、あくまでも妻として母親としての役割から逸脱しないことを前提とした補助的労働や家内労働にすぎなかったが（小山 1991）、『少女の友』において、少女たちが家族のためにおこなうのは、企業や工場ではたらくという、男性なみの賃労働である。まだ妻とも母ともならない少女には、妻や母である女性よりもっと積極的な

国家のための労働力としての期待があったことがうかがえよう。

たとえば、母親のために事務員としてはたらく（石川星影「二つの道」大正12年8月号）、病気の母親のとめるのもきかずに母親のために製糸工場ではたらく（渡部清子「熱涙」大正12年8月号）、母親と兄のために工場ではたらく（大澤重雄「兄帰るまで」大正13年8月号）などの小説にあらわれた少女像である。

これまでの時代にみられた少女たちはただ家族の言うがままになっていたといえる。明治後期にはただ盲目的にそれに従っていたし、大正前期にはそのことへの疑問が浮上してきたが、家族のためにあえてそれにしただがっていた。しかし、このころ、自分の才智や能力を発揮し、積極的に家族へ貢献している。そのため、そのことに対する満足感、それから、家族のためとはいえ、労働する楽しみが生まれている。したがって、今までのような悲愴感はありません。さらに、そこにおいて、母親はあくまでも内職などの補助的な労働や、家内労働以外何もせず、少女一人が賃労働をおこなっているのである。

また、②家族（特に親）の反対に苦しみながらも自分の才智や行動力をいかして自由と自己実現をかなえようとする少女（「自己実現タイプ」）は、たとえば、音楽の海外留学か母親のそばで孝行をするか二つの選択に引き裂かれるが、結局、恩師の強いすすめで海外留学を選ぶ（横山美智子「海鳥は唄ふ」大正14年8月号）、東京の女学校へ特別に給費生として進学することが決まったものの、そのことで両親に悪態をつかれいじめぬかれ、苦悶しながらも小学校の先生の説得により進学を果たす（岩下小葉「水車屋の娘」大正13年8月号）、母親に不孝者とののしられながらも演劇の道へ進む（石川星影「二つの道」大正12年8月号）、などの小説にあらわれている。このように、少女たちの自己実現は、常に、家族（特に親）にとって決してよい影響を与えないものであり、むしろ、家族（特に親）の幸福を阻害するものとして、語られている。そのため、少女の自己実現は、常に、家族（特に親）の反対にあったり、少女自身に罪悪感をもたらしたりする。それでも、少女たちは、悩み苦しみながらも、自己実現を追求しようとしてもがいているのである。その意味では、このような少女像は、女子教育論でいわれる良妻賢母像にまったくつながらないもの、むしろ、まったく否定してまうものであるといえる。

そうして、このような少女像の変化は、少女が身につけるべき価値の内容に、変化をもたらしている。これまで、美談などにおいて、正直であることや慈悲深いことなどの徳目が強調されていたが、この時代、それらはまったく消えてしまい、代わりに、勉学に励むことや労働に励むことを賛美する内容が主流となっている。たとえば、「楽壇の明星久野久子女史生ひ立ちの記」（大正10年9月号）には、音楽の情熱を燃やし、音楽に打ち込むことがいちばんの幸せであり、他に望みをもたない、と話す久野久子の生ひ立ちが語られている。また、大正11年4月号には、「立志発奮の人々」という記事があり、そこには、「よその子守りをしながら学校に通はして貰ふ静子さん」、「学校から帰るとすぐ夕刊を売る初子さん」、「袋張の内職をしながら訳書してゐる節子さん」、「会社の給仕をしながら学資を貯金してゐる花子さん」、「按摩をしながら母を扶けてゐる薫さん」、「女中になつて夜学に通ふ秀代さん」という模範とすべしとする少女たちが登場するが、これはすべて、勉学や労働に励む少女たちを称賛するものである。このように、少女に期待されるものが、これまでの慈悲や正直さなどから、勉学や労働に励むことへ変化しているのである。

## 第5章 自由と自己実現を謳歌する少女：昭和初期・昭和2～14年（1927～1939年）

### 1 モダンガールの登場

このころはエロ・グロ・ナンセンスに代表される昭和モダニズムの風潮が生まれた時期である（木村 1989）。そして、大正14年（1925年）ごろから、「モダンガール」「モダンボーイ」の言葉が、流行しはじめた。つばの広い麦わら帽子とどぶだぶの幅広いストラックスという、ビーチバジャマ・スタイルの女性たちが、大正12年（1923年）の関東大震災後、復興した銀座を闊歩したのである。そして、断髪、描き眉毛、マニキュアがこのモダンガールの条件でもあった。マスコミは「末世亡国の兆し」と嘆いたが、清沢冽が、モダンガールを男子専制の道徳に反対して生まれたものとしてみたり、菊池寛が、モダンガールのなかに見せかけの新しさだけでなく本質的に新しいものをみたように、モダンガールを評価する意見もあった（『女と男の時空』編纂委員会 1998）。

『少女の友』は、競争誌『少女倶楽部』の読者拡大の前に苦戦を強いられていたが、昭和に入ると、『少女倶楽部』の追隨をやめる。そして、映画や芝居、特に、宝塚少女歌劇のグラビアや記事をふんだんに載せはじめ、都会的な色合いをだそうとしはじめる（たとえば、「熱情映画『燃ゆる唇』」昭和2年4月号、「宝塚少女歌劇の花形」昭和4年5月号、「宝塚写真日記」昭和6年5月号、「宝塚少女歌劇生徒一人一話」昭和12年1月号）。昭和6年（1931年）末、岩下小葉から当時まだ28歳であった内山基に主筆が交代すると、その傾向はますます強くなる。内山は、さらに、投書欄・投稿欄を充実させるとともに、読者同士の交流会である「友ちゃん会」に力を入れ、今までよりも盛んなものにした。それから、読者の少女たちの座談会を設け、少女たちに自分のものの見方や夢などを自由に語らせ、誌面に掲載した。このように読者の少女たちを積極的に『少女の友』に参加させた。また、少女たちの熱烈な支持を獲得することになる画家の中原淳一をまだ無名のころに発掘し、ディズニーの影響をうけた新しい画風の松本かつちを登用した。そして、吉屋信子や川端康成、船橋聖一などの文壇の実力者を採用し、ユーモアと生活感あふれる作風の由利聖子、島本志津夫（神崎清）を登用するなど、『少女の友』の雑誌の内容もより充実した高度なものにしようとした。そして、そのことにより、東京や京阪神の大都市の女学生、それも、女学校の upper 級の読者に読者層をしばりこもうとしたのである。

この内山は、少女に対する見方についても、新しいものをもっていた。昭和13年1月号に「少女に贈る吉屋信子先生内山主筆対談会」と題した吉屋と内山の対談のようが掲載されているが、そのなかで、吉屋は、自分が受けてきた女学校の教育について、「教育があまりに実用的な方面を重んずる為か、それより一段高い人間的教養といふものが欠けていたやうにも思ひます。ですから、もつと良妻賢母主義を離れた一個の人間としての教養を授ける先生がみてくれたらと思つたことがございます」と、批判している。それをうけて、内山は、「今の日本には女の精神生活とか、さういふものを引つ張つて行く為の科学的の機関が何一つないでせう。文部省あたりでは科目のことや何か考へてゐるでせうけど、どんな風に今の女の子の精神生活が営まれて、どんな風に引つ張られて行くべきかといふ、さういふものを深く考察すべき機関がない。吉屋さんなど中心になられて若い婦人を集めてさういふ研究的な科学的なものをこしらへて世の中に発表して、今の女学校生活などに対して訂正を与へるやうになすつたら如何でせう」と、提案している。また、吉屋がフランスの少女たちについて、その自己主張の旺盛さを語ると、内山は、「さういふ社会的な点では日本の女の子は遅れてゐるかも知れせんね。『少女の友』の読者に訊くんです

けど、日本の美術とか絵画の世界などどんな風に思っているか、あなたの好きな画家はどんな人かといふと、余り応へる人がない。ああいふことに対する知識を、持たうとしてみないのですね。外国の小説など読んで見ると、子供でも或程度になると、自分の国の美術とか文学について、人に話せる位の知識を持たうとしてゐるところが見えますね」と、日本の少女を批判する。内山は、少女が自己主張とないことについて、よく、遺憾の言葉を載せている。各地で開かれた友ちゃん会で、少女たちが恥ずかしがってなかなか自分の意見を言わないため、「かうした会にはもつと自分を勇敢に発表して頂きたいものです」、「おとなしいことは勿論よいことですが、発表すべき時にははつきりと自分を表現する習慣をつけることは大切なことではないでせうか。これは日本の少女に共通の欠点だと思ひます」と、『少女の友』に何度も苦言を載せている（遠藤 1995-1997〔1〕, 45頁）。このように、内山は、良妻賢母主義教育を批判する吉屋の立場に賛同し、少女たちには、自分の意見をもち、それを堂々と主張することを求めている。

このような内山基のもとで、『少女の友』は、どのような少女像を伝えようとしていたのだろうか。

## 2 自由と自己実現を謳歌する少女像

図2-1、図2-2をみてもらいたい。数量的にみると、これまでの時代とくらべ、「自主性」と「個人主義」を志向する「自己実現タイプ」の出現頻度が圧倒的に高くなっている。図5-1をみても、この時代、他の少女像をしりぞけ、「自主性」と「個人主義」を志向する「自己実現タイプ」がもっとも多く出現していることがわかる。

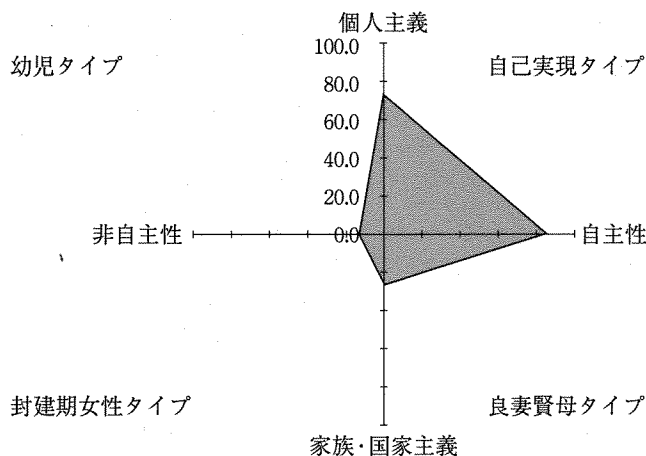


図5-1 昭和初期：『少女の友』の少女像

質的にみても、『少女の友』では、大正前、後期にみられた家族志向の「良妻賢母タイプ」は姿を消し、大正前、後期からみられはじめた「自己実現タイプ」をさらにおしすすめたかたちの、自由を謳歌し、のびのびと自己主張し、自己実現する少女たち（「自己実現タイプ」）がみられるようになり、たちまちのうちにそれが『少女の友』で主流となっている。そのような少女像があらわれた理由として、『少女の友』では、一つめに、今まで少女の自由と自己実現を妨げてきた家族（特に母親）がそれを応援するものとして語られるようになったこと、二つめに、少女の自由

と自己実現を応援する少女同士のネットワークが繰り返し語られるようになったことがあげられる。

この、自由と自己実現を追及する少女(「自己実現タイプ」)は、たとえば、奈良の山奥に住む少女が、家族や友人たちに絵の才能を認められ、友人たちの力添えで上京し、絵の道に突き進む(西條八十「古都の乙女」昭和13年7月号～昭和14年5月号)<sup>(2)</sup>、ヴァイオリンの才能のある少女とピアノの才能のある少女が、それぞれの両親やきょうだいに応援されながら、音楽の道に進む(横山美智子「嵐の小夜曲」昭和4年6月号～昭和5年7月号)<sup>(3)</sup>、家族総出で少女の女学校受験を応援、少女は受験勉強とそれにまつわる友情とに心悩ませる(吉屋信子「街の子だち」昭和9年1月号～12月号)<sup>(4)</sup>、女学校の教師としてはたらく(吉屋信子「伴先生」昭和13年1月号)、少女が女学校の校則に反し制服を流行のかたちで改造するなど、自由奔放にふるまう(島本志津夫「短い上衣」昭和13年1月号)などの小説にみられる。このように、これまで、少女の自由と自己実現は、家族(特に親)の幸福を妨げるものとして語られ、家族(特に親)から厳しい反対にあっていたのが、このころになると、少女の自由と自己実現を家族(特に母親)が応援するようになっていく。少女たちは、親やきょうだいのために自分のやりたいことをあきらめることもなく、自由を謳歌し、のびのびと自己主張し、自分のことだけに關心をもって生きようとしている。家族に支えられながら、受験や友情のことで思い悩む、このような少女たちは、現代の少女たちとほとんど変わらないようにみえる。

そして、万が一、少女の自由と自己実現について、家族の応援が得られない場合、『少女の友』において、少女たちのネットワークが、少女一人ひとりの自由と自己実現を支えるものとして立ち上がってくる。少女たちのネットワークは、ときには家族に歯向かってでも、少女を支え、励まし、少女の自由と自己実現がかなわないときには具体的な救出活動まで展開するのである。

たとえば、少女たちが友情を誓いあい、勉強やスポーツをお互いに教えあい、心の苦しみを共有するなどして、「私たちはね、だから、世界の灯にならなければならないと思ふの」、「たとえ小さいものでも、自分の仕事を持つといふことは、どんなに強い力だらう」とお互いに支えあいながら成長する(川端康成「乙女の港」昭和12年6月号～昭和13年3月号)<sup>(5)</sup>、家の財政上の理由から女学校を退学しなければならなくなった少女に、クラスメイト全員がその少女の親に直訴しにいき、また、募金を集め、その少女の退学を阻止しようとする(浅原鏡村「はるけき空」昭和4年5、6月号)、結核に苦しむ少女に、隣家の少女が励ましつづけ、自分の両親や世間が結核患者を白眼視することに憤る(船橋聖一「雪は白妙」昭和12年1月号)などの小説に、それは、あらわれている。

このような、「自己実現タイプ」は、女子教育論で語られた良妻賢母像とは、まったく結びつかないものであり、むしろ、それを打ち破るようなものすらある。このころ、国家が子どもの教育になみなみならぬ關心を示しており、昭和2年ごろから、文部省が家庭教育振興策を提起しはじめるという(小山 1999)。それは、妻であり母である女性にとって、子どものために生きる生きかたのみにしぼりつけられることを意味したが、少女にとっては家族のために生きる生きかたを母親一人に譲り渡し、自分は母親に子どもとして可愛がられ、応援されながら自分のために生きることができることを意味した。『少女の友』の少女たちは、奉仕する存在から奉仕される存在へと変化したのである。すなわち、少女たちは、近代家族のなかで、子どもとして、愛護され、慈しまれる対象としてとらえられるようになったのであった。

しかも、今まで、分散、二極分化してきた少女像が、ここに来て、完全に統一されたものに

なっている。この昭和初期、愛護され教育される子どもとしての「少女」が誕生するとともに、その「少女」イメージも明確化しているのである。

## 第6章 積極的な国家奉仕をする少女：戦時下・昭和15～20年（1940～1945年）

### 1 「雑誌浄化運動」

昭和6年（1931年）の満州事変以来の中国との紛争は、昭和12年（1937年）、日中全面戦争へと発展した。そうして、昭和16年（1941年）末には、日本は英米などを敵とする太平洋戦争へと突入していき、昭和20年（1945年）8月の敗戦まで、いわゆる「15年戦争」に全国民が巻き込まれていった。この戦時下、昭和12年（1937年）、文部省は『国体の本義』を刊行して各学校や社会教育団体に配布、皇国史観を徹底させ、日中戦争開始後には国民精神総動員運動を推進し、女学校の生徒たちにも、神社参拝や清掃、出征兵士への慰問袋作成、傷病兵の白衣縫製奉仕などを要求していく。また、昭和16年（1941年）、文部省は『臣民の道』を刊行して各学校に配布し、各女学校や女子専門学校では、勤労奉仕が強化され、体力錬成がおこなわれるようになっていく。そうして、戦局が緊迫していくにともない、学徒の勤労働員をますます強化し、中等・高等教育機関での修業年限の短縮・繰り上げ卒業がおこなわれ、さらに、昭和18年（1943年）に学徒出陣がはじまるなか、女学生たちにも、学校内外での軍需生産、食糧増産、農村援助にかりだされていくのである。戦争末期の昭和19、20年（1944年、1945年）ごろになると、大多数の公私立女学校は校舎の一部または全部が軍に接収されるか軍需工場に徴用され、女学生もそれらの部署または工場で勤労作業にたずさわようになる。そして、女学校の授業は1、2年生のみが週1、2日受ける程度になり、上級生の多くは全面的に作業動員されるにいたったのである（秋枝 1995）。

日中戦争突入を契機にマスメディアに対する規制も強まった。まず、昭和12年（1937年）9月、昭和11年（1936年）7月につくられた内閣情報委員会を改組し強化した内閣情報部が設置された。それから、昭和13年（1938年）4月1日、国家総動員法が公布され、出版統制はますます強化されることになったのである。そして、昭和13年（1938年）5月の女性雑誌の記事検閲を皮切りに、娯楽誌、児童誌へと、内務省の「雑誌浄化運動」は進んでいく。『少女の友』では、昭和13年9月号から宝塚少女歌劇の記事とグラビアが、掲載されなくなった。それから、『少女の友』の誌面から非時局的なペンネームが姿を消した。そうして、昭和15年6月号を最後に中原淳一の絵が追放されたのであった。昭和15年7月号の友ちゃんクラブには、「中原さんの画が暫く少女の友にのらなくなります。どうぞ我慢なすつて下さい。今はあらゆることに忍ばなければならないのです。国家がその忍耐を要求してゐるのです。父を兄を、夫を、子を失ふことさへも国の為に忍ばなければならない時です、今は僕達の一つの喜びを、国家に捧げませう。そして若き中原さんがよりよく、更に高きものを想像して帰つて来られる日まで、心からなるフレーを送ってみたいと思います」とある。この知らせに、読者たちの抗議の手紙が殺到し、次号から7千人もの読者が去ったといわれている（内山 1977）。また、昭和14年（1939年）の終わりごろから、少女たちの目の健康を確保するため、活字が大きくなり、ルビが減った。『少女の友』の付録のレターセットや人形帳にも、必ず、「皇軍慰問用」の文字が入った。『少女の友』のページ数自体も減っていき、昭和12年1月号は364ページであったのが、昭和15年1月号は304ページになり、昭和17年1月号は200ページ、昭和18年1月号は168ページ、昭和19年1月号は104ページ、昭和20年にはたったの68ページになっている。

それから、読者同士の交流会であり、少女たちの雑誌をつうじたネットワークづくりに貢献し

てきた、友ちゃん会が、昭和16年（1941年）9月の函館第二回の会を最後に閉鎖された。また、読者の少女たちの投書欄であった「友ちゃんクラブ」も、昭和17年11月号から「生活教室」へと姿を変え、昭和19年1月号に「生活全般を決戦的にきりかへて進ませう。生活教室の投書も出来るだけさういつた生活の報告でありたいと考へます」と記されるように、軍国調の内容へと変化していった。ただ、投稿欄は、それまで編集者がおこなっていた作文や詩、短歌の選を、作文を川端康成、詩を室井犀星、短歌を窪田空穂が選をすることになり、充実したものにしようとしていた。ところが、昭和19年1月号から予告なしに、「決戦下の評論家として最も優れた」浅野晃、「歌人代議士」吉植庄亮、「決戦詩人」大木敦夫へ、一斉に変更され、投稿欄は完全に時局にそった選となるのである。投書欄・投稿欄そのものも、昭和20年ごろには姿を消している。

また、昭和14年（1939年）の終わりごろから、『少女の友』には戦争を賛美する記事が次々に掲載されはじめている（「東亜を侵略した者」昭和17年1月号、「わが同胞はかく戦つた」昭和17年1月号）。それから、国の食料供給のためにはたらく農村の労働者を賛美する記事や、女学生の農村での労働や、軍需工場での労働を賛美する記事が、掲載されはじめている（「赤十字の旗の下」昭和14年8月号、「満州の少女たち」昭和14年8月号、「漁村曙」昭和16年1月号）。

それでは、『少女の友』そのものが急激に変化していくなか、『少女の友』掲載小説には、どのような変化があったのだろうか。開戦の当初こそ、吉屋信子、川端康成などの昭和初期の人気作家に加え、林芙美子、船橋聖一、サトウ・ハチローなども作品を載せるようになったが、しだいに、それらの作品も戦時色を強め、ついに、内務省の圧力のため、吉屋信子をはじめとする昭和初期の人気作家たちは、次々と姿を消していく。昭和12年12月号の島本志津夫（神崎清）「歎呼の声」には、国語教師である「僕」が以下のように少女たちに語っている。

この戦争が早く片づけばよし、万一長びくやうなことになる、その影響は生やさしいものではありません。物価が高くなり、物資が欠乏してくる——あなた方のスカートだつて、そんな風にひだを多くすることが許されなくなる日がやつて来るかもしれません——戦争の歯車はスカートの長い婦人をそのなかに巻きこんで、荒々しい方法で教育します。戦争の砲火は台所の隅で眠つてゐた家庭の婦人たちの足もとで爆発し、一ぺんに目をさまさせます。戦争の号令は、ブランコに乗つて遊んでゐた女学生を、校庭に集めて社会に送り出して行きます。すべての婦人に生活の戦ひに参加する権利と義務が認められ、これまでのやうに婦人の地位を低めておくことができなくなります。要するに、戦争は不幸な出来事である反面、古い時代の不幸を新しい時代の幸福に代える鍵を、あなた方に与へてくれてゐるのです。この戦争を最後の戦争としてあなた方は、戦争の中で賢くなつて、輝かしい次の時代の扉を開かなければなりません！

この言葉は、『少女の友』の誌面の内容においても、ことごとく的中していくのである。

## 2 積極的な国家奉仕をする少女像

これまで、自主性をもたない少女の姿から自主性をもつ少女の姿へ、また、家族や国家、地域社会の利益を優先する生きかたから、自分自身の利益を優先する生きかたへ、明治後期から昭和初期にかけて、『少女の友』の少女の姿は変化してきた。しかし、太平洋戦争が開始され、マスメディアへの国家的介入が厳しくなったこの時代、数量的にも劇的な変化があらわれている。図2-1、図2-2をみてもらいたい。「個人主義」の志向をもつ少女が昭和初期とくらべると大幅

に減少し、「自主性」はいよいよ増加している。昭和初期にみられた「自主性」と「個人主義」を志向する「自己実現タイプ」は減少し、「自主性」と「家族・国家主義」を志向する「良妻賢母タイプ」がふたたび増加しており、すべての時代をとおして、もっとも高い割合で出現していることがわかる。図6-1をみても、「自主性」と「家族・国家主義」を志向する「良妻賢母タイプ」が、この時代の中心的な少女像であることがわかる。

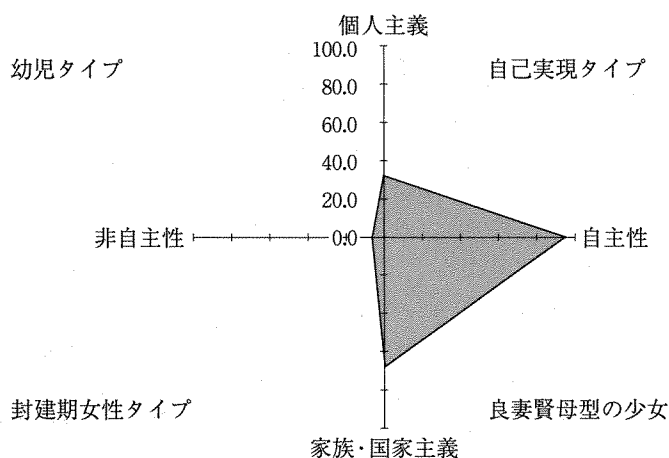


図6-1 戦時下：『少女の友』の少女像

ただし、その「良妻賢母タイプ」も、質的にみるとひとつとおりはではない。まず、太平洋戦争開始直後は、その「良妻賢母タイプ」は、二つにわかれている。それは、①自分の才智や行動力をいかして社会のためにはたらく少女（社会志向の「良妻賢母タイプ」）、それから、②自分の才智や行動力をいかして家族のためにはたらく少女（家族志向の「良妻賢母タイプ」）である。ここでも、少女がおこなうのは補助的労働や家内労働ではなく、賃労働である。そして、①は、自分の労働が社会に認められることでやりがいを感じているし、②もまた、家族への労働の意欲の源泉にあるのは、家族のための労働が社会のための労働につながるという認識であったため、そこでも、やはり、自分の労働が社会にとって有意義なものであると認識してやりがいを感じている。したがって、①や②の少女たちのおこなう労働は、社会とのつながりや、少女たちの自己実現に結びついたものであったのである。その意味で大正後期の、社会という視点もなく、自己実現とも結びつかない「良妻賢母タイプ」とは異なる。

①自分の才智や行動力をいかして社会のために生きる少女（社会志向の「良妻賢母タイプ」）は、たとえば、向学心に燃え女子大学への進学を希望していた少女が、それをとりやめて貧しい子どもたちのために保母としてはたらく（内山基「白い燈台」昭和15年1月号）、全盲あるいは聾啞の子どもたちのためにはたらく（川端康成「美しい旅」昭和14年7月号～昭和16年4月号、「続美しい旅」昭和16年9月号～昭和17年10月号）<sup>6)</sup>、「猫も杓子も職業婦人になりたがって」いると批判される女学生たちだが、教師は「生活の必要と社会の要求に迫られているためであつて、それまでは家庭だけを守つておればよかつた日本の婦人に、更に新しい責任が加わつてきた」と理解する（島本志津夫「職業婦人」昭和15年11月号）などの作品にあらわれており、②の自分の才智や行動力をいかして家族のために生きる少女（家族志向の「良妻賢母タイプ」）は、たとえば、

家内労働をおこなうことに不満をもつ少女が、それが銃後のつとめであることを意識し、積極的におこなうようになる（由利聖子「次女日記」昭和14年8月号）、将来の兵士かその妻を産むことになることと認識する姉の出産を、妹が積極的に手助けする（島本志津夫「病院の窓」昭和17年1月号）、などの作品にあらわれている。このように、『少女の友』の少女たちは、一つには、社会のためにはたらくようになる。それは、誰かの言うがままになって、おこなうのではない。社会の人々のために、自分からすすんで労働することを決め、そうして、その行動力をもってしてそれを実行している。そして、それが社会のために有益な労働であると認識することで、少女たちは、その労働への喜び、やりがいを感じている。また、二つには、ふたたび、『少女の友』の少女たちは家族のためにはたらくようになる。しかしながら、大正後期のころと違うのは、その動機である。少女たちは、大正後期のように、親の自分への愛情に応えるためのみに労働をするのではない。少女たちは、それに加え、家族のためにおこなう労働が、社会のため、あるいは、国家のための労働につながる、と認識し、おこなっているのである。そのため、そこでも、少女たちは喜び、やりがいを感じている。

しかし、戦争が激化するにともない、「良妻賢母タイプ」のなかの二つの少女像が一つの少女像に収斂される。その少女像とは、③自分の才智や行動力をいかして国家のためにはたらく少女（国家志向の「良妻賢母タイプ」）なのである。①や②でみられた「自己実現への欲求」と、「自己実現への欲求が社会に認められることへのあくなき欲求」を、うまく戦争のために利用するかたちであらわれたのが、③の少女像であると理解できる。女子教育論においては、このころ、女性には強い兵士を産み育てるため、母としての役割を強烈に強調されるようになったといわれているが、『少女の友』において、少女は、兵役こそないものの、労働奉仕といわれる農作業や工場労働などの直接的な国家奉仕の担い手となることが求められている。

このような、③自分の才智や行動力をいかして国家のために生きる少女（国家志向の「良妻賢母タイプ」）は、たとえば、妹が軍需工場で寝泊まりしながらはたらき、看護婦の姉がそれを励ます（中里恒子「寄宿舎にて」昭和19年8月号）、少女が母親とともに労働奉仕として農村で農作業をする（芹澤光治良「けなげな娘達」昭和17年8月号）、母親や姉とともに国のためになぎなたをあやつって敵と戦い、敵の捕虜になる前に親子あるいは姉妹の情を確認しあいながら自害する（大地唯雄「命のかぎり」昭和20年4月号）などの作品にあらわれている。このように、『少女の友』の少女たちは、国家のため、自らの行動力をもってして積極的に奉仕するようになっている。そして、少女たちは、その労働をとおして国家に貢献できるということに満足している。そのため、その労働に喜びややりがいを感じているのである。

## 終章

このように、『少女の友』において、部分的にみると、明治41年（1908年）から明治44年（1911年）までは無知・無力で家族に従順な封建期女性タイプの少女が語られるが、大正に入るとある程度の自主性をもって家族につくす家族志向の良妻賢母タイプの少女が少しずつ語られはじめ、大正9年（1920年）からは、はっきりと、封建期女性タイプの少女とはまったく別の、自主性と行動力をもち、親、きょうだいのために職業に従事する家族志向の良妻賢母タイプの少女が語られるようになる。これをみるかぎり、『少女の友』も部分的には学校教育の伝えようとしていたジェンダー規範である良妻賢母という規範につながる少女像を提供しようとしていたといえる。しかし、一方で、『少女の友』では、大正のはじめから、少女たちは「自己実現への欲求」を

もっているものとしても語られている。その意味では、『少女の友』は、女子教育論の良妻賢母像を打ち破る可能性を内包した少女像をも伝えようとしていたのである。

そうして、昭和に入ると、その「自己実現への欲求」がいきなり噴出し、『少女の友』において、自由を謳歌し、自己実現を追求する少女が語られるようになる。そこでは、家族は少女を縛りつけるものではなく、むしろ、少女の自由の謳歌と自己実現を応援するものとして語られている。近代家族のなかで、愛護され慈しまれる子どもとして、少女はとらえられるようになったと考えることができる。そして、家族の縛りから解き放たれた少女たちは、連帯しあい、お互いの自己実現を支えあうネットワークを誕生させるものとして語られている。しかも、『少女の友』で語られる「少女」イメージ自体も、明治後期は分散、大正前、後期は二極分化していたが、昭和に入ると統一される。教育され愛護される「少女」の誕生と、「少女」イメージの明確化は時期を同じくしていたのである。

しかし、戦争の勃発とともに、大正の良妻賢母タイプの少女と違い、社会とのつながりや自己実現と不可分のものであり、社会のためにはたらく社会志向、家族志向の良妻賢母タイプの少女があらわれている。この新しい良妻賢母タイプの少女は、戦争勃発前、家族からの拘束から解放されることで自由と自己実現を手に入れ、そのなかで自己実現への貪欲なまでの欲求と、それが家族ひいては社会に認められることに対する喜びを強烈にもったからこそ、生まれたものだといえる。そうして、それらを戦争にうまく利用するかたちであらわれたのが、国家のためにはたらく国家志向の良妻賢母タイプの少女であり、すべてが、それに収斂されてしまうのである。

このような分析結果からみえてきたのは、少女が、慈しまれ愛される存在としての「子ども」ととらえられることによって、男性のように「直接的な国民」となるプロセスであった。その国民化は、「間接的な国民」という色合いの濃い国家からの良妻賢母教育という回路から生まれたわけではない。また、男性のように「直接的な国民」として学校教育およびそれに先導された家庭教育という回路から生まれたわけでもない。昭和のはじめ、「子ども」として家族（特に親）や社会から愛護され慈しまれる存在となることで、少女は、家族（特に親）へ奉仕する存在ではなくなり、自由を謳歌し自己実現を追求できるようになった。そして、自分の自己実現の追求が、家族や社会に称賛されることを認識できるようになった。だからこそ、戦争がはじまるとすぐ、それがもっとも強力なかたちで実現する国民としての国家奉仕を、『少女の友』の少女たちは積極的かつ主体的に選びとっていくのである。言い換えれば、そのような『少女の友』の少女たちの意識の高まりと自主性の向上が、戦時下、男性の代替としての労働を求める国家に、うまくからめとられていくのである。そうして、同時に、このような少女の国民化は、少女たちを愛護する「良妻賢母」という母親がいなければ成り立ち得なかったものといえる。すなわち、その国民化は、国民国家から家族へ、あるいは国民国家から個人へ、という一方向的な回路ではない。国家が「良妻賢母」をつくりだし、その「良妻賢母」の中心となる近代家族が少女を愛護し、そのなかで自主性を向上させた少女をもう一度国家が回収する、このような国民化の過程であったのである。

このように、『少女の友』の表象としての「少女」、言い換えれば、社会意識、社会観念としての「少女」をあきらかにしたが、本稿では、それを新中間層の少女たちがどのように受けとっていたのか、また、それを現実にもどのように結びつけていたのか、ということまでは、方法上、あきらかにできない。のちの課題としたい。

## 〈注〉

- (1) このような幼い無邪気な少女が繰り返し語られることについて、このころの『少女の友』の読者対象は幼児か小学生なのでは、と、疑問を抱く意見があるかもしれない。しかし、佐藤(佐久間)りか(1996)は、『少女の友』明治41年10月号の投書欄やクイズ当選欄の平均年齢を調べ、全体の8割から9割が12歳以上15歳以下で、高等女学校の低学年及び高等小学校にあたる年齢層によって占められていると指摘している。
- (2) 「古都の乙女」は、もちろん『少女の友』に掲載されたものにも目をとおしているが、国書刊行会の『西條八十全集 第12巻』(1993, 293-459頁)も参照している。
- (3) 「嵐の小夜曲」は、三一書房の『少年小説大系 第24巻』(1993, 47-157頁)も参照している。
- (4) 「街の子だち」は三一書房の『少年小説大系 第25巻』(1993, 103-197頁)も参照している。
- (5) 「乙女の港」は昭和初期の『少女の友』の代表する作品といってもいい。川端が『少女の友』の愛読者であったこともあって、このころ文壇からは一段低くみられていた少女小説に、川端は意欲を燃やしてとりかかる。『少女の友』でもっとも人気のあった中原淳一が挿絵をつけたことも加わって読者の反響は大きかった。「乙女の港」の連載が終わった翌月の昭和13年4月号のクラブ室便り(『少女の友』の編集者からのお知らせ)には、『乙女の港』のすばらしい反響は、今でも楽しい回想です」という自賛の言葉が載せられている。なお、「乙女の港」は、新潮社の『川端康成全集 第20巻』(1981, 7-183頁)も参照している。
- (6) これは、太平洋戦争開始前の作品である「乙女の港」や「花日記」とは、まったく毛色の異なる作品となっている。投書にも、絶賛するものもあるが、「初めは大きらひでした」(昭和15年3月号)というものもある。大好評であった「乙女の港」や「花日記」とくらべると、読者の少女たちに違和感をもたせたようである。川端も「これはをかきな小説だ。書き進んでも、感興に乗れるといふことがなく、無理押し の努力である。骨が折れ、時間がかかる割に、面白さは乏しく、女学生達がよく読んでみてくれると思ふ」(昭和14年8月号)と述べている。なお、『川端康成全集 第20巻』(1981)に掲載されている「美しい旅」(399-658頁)、「続美しい旅」(659-733頁)も参照している。

## 〈参考文献〉

- 秋枝薫子 1995 「良妻賢母主義教育の逸脱と回収——大正・昭和前期を中心に」奥田睦子編『女と男の時空——日本女性史再考5 闘ぎ合う女と男——近代』藤原書店
- 秋山正美 1992 『少女たちの昭和史』新潮社
- 有山輝雄 1984 「192, 30年代のメディア普及状態——給料生活者, 労働者を中心に——」『出版研究』15
- 遠藤寛子(編) 1993a 『少年小説大系 第24巻 少女小説名作集(1)』三一書房  
 —— (編) 1993b 『少年小説大系 第25巻 少女小説名作集(2)』三一書房  
 —— 1995-1997〔1〕-〔31〕 「内山主筆と『少女の友』〔1〕-〔31〕」『花も嵐も』1995年6月号-1997年12月号
- 本田和子 1990 『女学生の系譜——彩色される明治』青土社
- 実業之日本社社史編纂委員会(編) 1997 『実業之日本社百年史』実業之日本社
- 川端康成 1981 『川端康成全集 第20巻』新潮社
- 川島武宜 2000 『日本社会の家族的構成』岩波書店
- 木村涼子 1989 「婦人雑誌にみる新しい女性像の登場とその変容——大正デモクラシーから敗戦まで

——」『教育学研究』56(4)

- 小山静子 1991 『良妻賢母という規範』勁草書房
- 1999 『家庭の生成と女性の国民化』勁草書房
- 久米依子 1997 「少女小説——差異と規範の言説装置」小森陽一・紅野謙介・高橋修編『メディア・表象・イデオロギー』小沢書店
- 村上信彦 1983 『大正期の職業婦人』ドメス出版
- 牟田和恵 1996 『戦略としての家族 近代日本の国民国家形成と女性』新曜社
- 永嶺重敏 1997 『雑誌と読者の近代』日本エディタースクール出版部
- 日本近代文学館（編） 1977 『日本近代文学大事典 第5巻 新聞・雑誌』講談社
- 「女と男の時空」編纂委員会（編） 1993 『年表・女と男の時空』藤原書店
- 大阪国際児童文学館（編） 1993 『日本児童文学大事典 第2巻』大日本図書株式会社
- 西條八十 1993 『西條八十全集 第12巻』国書刊行会
- 坂本佳鶴恵 1993 『＜家族＞イメージの誕生』新曜社 1997
- 伊藤（佐久間）りか 1996 「清き誌上でご交際を——明治末期少女雑誌投書欄に見る読者共同体の研究」『女性学』4
- 内山基 1977 「編集者の思い出 或るさしえ画家のこと」『MODE et MODE』174
- 山村賢明 1971 『日本人と母——文化としての母の観念についての研究——』東洋館出版社

## 〈資料〉『少女の友』掲載小説分類表

		個人主義	家族・国家主義	自主性	非自主性
① 明治 治 後 期	明治41年 10月号	竹久夢二「月の歌」 与謝野晶子「懸賞音楽会」 高信映水「光ちやんのお裁縫」 東草水「盲目娘のために月光曲を弾いた大音楽家」 須磨子「大悪龍王」 長谷部湘雨「貰はれて行つた秋子さん」	渡邊白水「死ぬまで親の遺言を守りし貞女お正の美談(続)」 星野水裏「旅行中の親切が大勢の友達を感動させた話」 後閑菊野「喜んで筆記を貸した生徒と粗服を少しも気にしない生徒」1・2 瀧澤素水「縮緬の着物」 牧山眞竹「山賊の娘」	須磨子「大悪龍王」 後閑菊野「喜んで筆記を貸した生徒と粗服を少しも気にしない生徒」1・2 星野水裏「旅行中の親切が大勢の友達を感動させた話」	竹久夢二「月の歌」 与謝野晶子「懸賞音楽会」 高信映水「光ちやんのお裁縫」 東草水「盲目娘のために月光曲を弾いた大音楽家」 牧山眞竹「山賊の娘」 長谷部湘雨「貰はれて行つた秋子さん」 渡邊白水「死ぬまで親の遺言を守りし貞女お正の美談(続)」 瀧澤素水「縮緬の着物」
	明治41年 12月号	竹久夢二「武坊展覧会」 与謝野晶子「お化うさぎ」 小野美智子「肩上げと縫ひ込み」 高信映水「光ちやんのお買物」 星野水裏「蝦で鯛を釣り損ねたヒロ子さんの失敗談」	東草水「紅い手巾」 須磨子「恐ろしき旅」 渡邊白水「不具の両親を助けて家を再興した孝女おとらの美談」 長谷部湘雨「お稽古」 瀧澤素水「いとこ」	東草水「紅い手巾」 須磨子「恐ろしき旅」 星野水裏「蝦で鯛を釣り損ねたヒロ子さんの失敗談」	竹久夢二「武坊展覧会」 与謝野晶子「お化うさぎ」 小野美智子「肩上げと縫ひ込み」 高信映水「光ちやんのお買物」 渡邊白水「不具の両親を助けて家を再興した孝女おとらの美談」 長谷部湘雨「お稽古」 瀧澤素水「いとこ」
	明治42年 9月号	竹久夢二「鸚鵡のこつづけ」 高信映水「おとなりのお嬢様」 須磨子「大黒魔殿」	碧川とよ子「涙を流して長い間の癖を悔ひ改めた感心な生徒」 渡邊白水「辛苦して親の仇と夫の仇を討つたお孝の美談」 瀧澤素水「美登子様」 長谷部湘雨「白痴と其妹」	須磨子「大黒魔殿」 渡邊白水「辛苦して親の仇と夫の仇を討つたお孝の美談」 長谷部湘雨「白痴と其妹」	竹久夢二「鸚鵡のこつづけ」 高信映水「おとなりのお嬢様」 碧川とよ子「涙を流して長い間の癖を悔ひ改めた感心な生徒」 瀧澤素水「美登子様」
	明治42年 11月号	須磨子「少女の宮」 与謝野晶子「紅葉の子」 竹久夢二「ベースボール」	渡邊白水「主家のために命を捨てて悪人を除いた富士女」 堀貞子「不幸な父とともに畑を耕して冬期休暇を送つた生徒」 大久保素水「母の涙」 瀧澤素水「美登子様」1・2 長谷部湘雨「生か死か」	須磨子「少女の宮」 渡邊白水「主家のために命を捨てて悪人を除いた富士女」 大久保素水「母の涙」 瀧澤素水「美登子様」2	与謝野晶子「紅葉の子」 堀貞子「不幸な父とともに畑を耕して冬期休暇を送つた生徒」 長谷部湘雨「生か死か」 竹久夢二「ベースボール」 瀧澤素水「美登子様」1
	明治43年 2月号	須磨子「水子の入学祝ひ」1 石塚月亭「少女島」 東草水「座敷牢」 竹久夢二「泣き笑ひ」 高信映水「雪のうさぎ」1・2	長谷部湘雨「乞食の群」 渡邊白水「遺言を守つて借金を返し又二人の妹を養ふ」 須磨子「水子の入学祝ひ」2 門奈くり子「卒業するまで金銭の出入帳をつけてゐた生徒」	永代新川「水子の入学祝ひ」1 石塚月亭「少女島」 門奈くり子「卒業するまで金銭の出入帳をつけてゐた生徒」 東草水「座敷牢」	高信映水「雪のうさぎ」1・2 渡邊白水「遺言を守つて借金を返し又二人の妹を養ふ」 竹久夢二「泣き笑ひ」 長谷部湘雨「乞食の群」 永代新川「水子の入学祝ひ」2
	明治43年 8月号	与謝野晶子「蓮の花と子供」 星野水裏「仲よし」 大野春圃「爆裂弾(前号の続)」	永代新川「別離の歌」 岩下小葉「花の会」1・2 渡邊白水「十九年の間少しも変らぬ孝行を尽す」	有本芳水「乳母の家」 岩下小葉「花の会」 清水儀六「家庭にあつて家事の手伝ひをする生徒」	与謝野晶子「蓮の花と子供」 永代新川「別離の歌」 星野水裏「仲よし」

① 明 治 後 期	明治43年 8月号	有本芳水「乳母の家」 高信峽水「あべこべ」	清水儀六「家庭にあつて家事の手伝ひをする生徒」	高信峽水「あべこべ」	大野春圃「爆裂弾（前号の続）」 岩下小葉「花の会」2 渡邊白水「十九年の間少しも変らぬ孝行を尽す」
	明治44年 1月号	岩下小葉「お袴」 尾島菊子「弾初め」 山邊知之「学校外で技芸を修めてゐる生徒」 内田敏子「拾七歳」 月野かつら「知られぬ梯」 高信峽水・大野緑水「初夢」 星野水裏「初江より亀久尾へ」 竹田寥水「影のやうな少女」 永代静雄「幸福の秘密」	与謝野晶子「黄色の土瓶」 渡邊白水「危く悪者の手にかからんとして正行に助けられたる弁内侍」 鈴屋花子「嬰兒を抱きながら馬に乗つて戦争したアニタの勇氣」	竹田寥水「影のやうな少女」 山邊知之「学校外で技芸を修めてゐる生徒」 内田敏子「拾七歳」 渡邊白水「危く悪者の手にかからんとして正行に助けられたる弁内侍」 月野かつら「知られぬ梯」 鈴屋花子「嬰兒を抱きながら馬に乗つて戦争したアニタの勇氣」 永代静雄「幸福の秘密」	与謝野晶子「黄色の土瓶」 岩下小葉「お袴」 尾島菊子「弾初め」 星野水裏「初江より亀久尾へ」 高信峽水・大野緑水「初夢」
	明治44年 8月号	岩下小葉「愛ちゃん（その七）」 渡邊白水「和歌を詠んで無実の罪を雪いだ小大進」 内田敏子「どこへ」 鈴屋花子「児童に交つて雪合戦をなされたオランダ女王」	与謝野晶子「トツカビイとチンミヨング」 尾島菊子「なさぬ仲」 大久保紫水「兄思ひ」 山田邦子「小さき罪びと」 渡邊禎三郎「母子巡礼」	渡邊白水「和歌を詠んで無実の罪を雪いだ小大進」 鈴屋花子「児童に交つて雪合戦をなされたオランダ女王」 内田敏子「どこへ」	与謝野晶子「トツカビイとチンミヨング」 岩下小葉「愛ちゃん（その七）」 尾島菊子「なさぬ仲」 大久保紫水「兄思ひ」 渡邊禎三郎「母子巡礼」 山田邦子「小さき罪びと」
	明治45年 1月号	江見水蔭「心の美人」 生田葵「正直の辻」 与謝野晶子「環の一年間」 尾島菊子「紅薔薇」1	岩下小葉「誰の家」 山田邦子「下梳きのお仙」 石井保「磯の松風」1・2 尾島菊子「紅薔薇」2 渡邊白水「和歌を詠んで秘蔵の梅を返して戴いた紀内伝」 大久保紫水「富美子」1・2 鈴屋花子「乳母の懐から児を奪つて乳を吞ませたトルストイ夫人」 石谷傳市郎「良人の遺言を守つて生蕃人に首を切る事を止めさせた呉鳳の妻」	江見水蔭「心の美人」 山田邦子「下梳きのお仙」 生田葵「正直の辻」 大久保紫水「富美子」1・2 石井保「磯の松風」1 渡邊白水「和歌を詠んで秘蔵の梅を返して戴いた紀内伝」 鈴屋花子「乳母の懐から児を奪つて乳を吞ませたトルストイ夫人」	岩下小葉「誰の家」 石谷傳市郎「良人の遺言を守つて生蕃人に首を切る事を止めさせた呉鳳の妻」 尾島菊子「紅薔薇」1・2 石井保「磯の松風」2 与謝野晶子「環の一年間」
	明治45年 8月号	長谷部湘雨「黒助と黒ちゃん」1・2 与謝野晶子「環の一年間」	渡邊白水「十年墓を守つて亡父の罪を赦された妙沖尼」 鈴屋花子「盲目政治家の妻」 山田邦子「鯛鳴けば」 江見水蔭「心の美人」 尾島菊子「松葉牡丹」 岩下小葉「誰の家」	長谷部湘雨「黒助と黒ちゃん」1・2 江見水蔭「心の美人」	尾島菊子「松葉牡丹」 岩下小葉「誰の家」 鈴屋花子「盲目政治家の妻」 渡邊白水「十年墓を守つて亡父の罪を赦された妙沖尼」 与謝野晶子「環の一年間」 山田邦子「鯛鳴けば」
大正2年 1月号	江見水蔭「飛ぶ少女」 岩野春人「君ちゃんの元日」 岩下小葉「伯母さん」	喜田貞吉「異国の空に芳烈の名を轟かせし樟姫と大葉子」1・2 尾上鈴吉「夢の母子」 山田邦子「あの山越えて」 竹田勝子「女の兵隊」 佐倉新月「山駕籠」	江見水蔭「飛ぶ少女」 喜田貞吉「異国の空に芳烈の名を轟かせし樟姫と大葉子」2 尾上鈴吉「夢の母子」 竹田勝子「女の兵隊」 山田邦子「あの山越えて」 佐倉新月「山駕籠」	岩下小葉「伯母さん」 岩野春人「君ちゃんの元日」 喜田貞吉「異国の空に芳烈の名を轟かせし樟姫と大葉子」1	

②	大正2年 8月号	東草水「汽笛の鳴る時」 江見水蔭「飛ぶ少女」 眞山青果「美乎子の涙」 水瀬秋子「野菊」	天野雄彦「かがみ山」 渡邊白水「不平」 山田邦子「夏のあけぼの」 竹田勝子「少女の血汐」	江見水蔭「飛ぶ少女」 水瀬秋子「野菊」 山田邦子「夏のあけぼの」 天野雄彦「かがみ山」 東草水「汽笛の鳴る時」 竹田勝子「少女の血汐」 眞山青果「美乎子の涙」	渡邊白水「不平」
	大正3年 1月号	岩下小葉「みなし兒」 大久保紫水「鶯子のお正月」 三津木春影「まぼろしの少女」 眞山青果「美乎子の涙」	小倉紅楓「声のあるじ」 國木田治子「白犬」 岩佐好朝「初めは虎に助けられ後には虎を助けた貞女」 灰野庄平「窟物語」	岩下小葉「みなし兒」 大久保紫水「鶯子のお正月」 岩佐好朝「初めは虎に助けられ後には虎を助けた貞女」 小倉紅楓「声のあるじ」 眞山青果「美乎子の涙」 灰野庄平「窟物語」	三津木春影「まぼろしの少女」 國木田治子「白犬」
	大正3年 8月号	青江夏江「物言ふ人形」 岩下小葉「みなし兒」 高信峽水「お土産」 大久保紫水「デク子の大演説」	梶間黙雄「義理の姉」 三津木春影「まぼろしの少女」 藤生訳「恐ろしき生蕃人に襲はれて万死に一命を拾ひし少女の実話」	梶間黙雄「義理の姉」 岩下小葉「みなし兒」 藤生訳「恐ろしき生蕃人に襲はれて万死に一命を拾ひし少女の実話」 高信峽水「お土産」 大久保紫水「デク子の大演説」	青江夏江「物言ふ人形」 三津木春影「まぼろしの少女」
	大正4年 1月号	一條みどり「敏ちやんの春」 岩下小葉「めぐりあひ」 長田幹彦「春のゆくへ」 山田邦子「十七の鐘」 渡邊白水「涙の春」1・2 記者「彗星を発見した女の天文学者」 三津木春影「真か偽か」 記者「竹田宮北白川宮兩妃殿下の御少女時代」	岩下小葉「めぐりあひ」2	岩下小葉「めぐりあひ」1 長田幹彦「春のゆくへ」 山田邦子「十七の鐘」 三津木春影「真か偽か」 記者「竹田宮北白川宮兩妃殿下の御少女時代」 渡邊白水「涙の春」1 記者「彗星を発見した女の天文学者」	一條みどり「敏ちやんの春」 渡邊白水「涙の春」2 岩下小葉「めぐりあひ」2
	大正4年 8月号	長田幹彦「春のゆくへ」 宇野浩二「国境の峠に注ぐ涙の雨」 一條みどり「清い涙」 作者不明「埋れ琴」		長田幹彦「春のゆくへ」 宇野浩二「国境の峠に注ぐ涙の雨」 作者不明「埋れ琴」	一條みどり「清い涙」
	大正5年 1月号	一條みどり「三輪車」1・2 洪澤青花「バンザーイ」 和田鼎「不幸に遭ひながら責任を全ふす」 長田幹彦「露のいのち」 森下雨村「怪星の秘密」 山田邦子「幼き日」 川端龍子「やんちゃむすめ」 作者不明「羽子物語」	今西吉雄「七日月の晩」 北濱千吉「病母の看護しながら無遅刻で登校す」	一條みどり「三輪車」1・2 洪澤青花「バンザーイ」 和田鼎「不幸に遭ひながら責任を全ふす」 長田幹彦「露のいのち」 森下雨村「怪星の秘密」 山田邦子「幼き日」 川端龍子「やんちゃむすめ」 作者不明「羽子物語」 北濱千吉「病母の看護しながら無遅刻で登校す」	今西吉雄「七日月の晩」
大正5年 8月号	長田幹彦「露のいのち」 森下雨村「怪星の秘密」 三津木貞子「腹痛み」	今西吉雄「縫れ合う琴と笛」 菅野菊枝「故郷へ」 作者不明「ワシントンの母マリー」 作者不明「憂き世」	今西吉雄「縫れ合う琴と笛」 菅野菊枝「故郷へ」 長田幹彦「露のいのち」 作者不明「ワシントンの母マリー」	三津木貞子「腹痛み」 森下雨村「怪星の秘密」 作者不明「憂き世」	

② 大 正 前 期	大正6年 1月号	山田邦子「山の家」 渋澤青花「近眼鏡」 加藤みどり「鬼灯と鼠」1・2 森下雨村「ダイヤモンド」	今西吉雄「おお初日出よ」 三津木春影「福の神のお見舞」 江口千代「冬の来る頃」 菅野菊枝「春にあへる人々」1・2	三津木春影「福の神のお見舞」 渋澤青花「近眼鏡」 江口千代「冬の来る頃」 加藤みどり「鬼灯と鼠」1・2 菅野菊枝「春にあへる人々」1	今西吉雄「おお初日出よ」 山田邦子「山の家」 菅野菊枝「春にあへる人々」2 森下雨村「ダイヤモンド」
	大正6年 8月号	渋澤青花「夏子の招待」 森下雨村「ダイヤモンド」	今西吉雄「嵐を呼ぶお種の抜き手」1・2 明石精一「蝸牛」 菅野菊枝「姉の為に」1・2 村山至大「煙突の煙」	渋澤青花「夏子の招待」 今西吉雄「嵐を呼ぶお種の抜き手」1・2 菅野菊枝「姉の為に」1・2 村山至大「煙突の煙」	明石精一「蝸牛」 森下雨村「ダイヤモンド」
	大正7年 1月号	森下雨村「西藏に咲く花」 上司小剣「羽子板くらべ」1・2 菅野菊枝「甦らんとして」 池田みすず「肩に積つた雲脂」 作者不明「淋しい春」 藍澤敬寛「負けても競技をやめなかつた少女」 三津木貞子「麗子さん」1・2	今西吉雄「闇を縫ふ蹄の音」	今西吉雄「闇を縫ふ蹄の音」 三津木貞子「麗子さん」1・2 藍澤敬寛「負けても競技をやめなかつた少女」 池田みすず「肩に積つた雲脂」 作者不明「淋しい春」	上司小剣「羽子板くらべ」1・2 菅野菊枝「甦らんとして」 森下雨村「西藏に咲く花」
	大正7年 8月号	江見水蔭「黒蛮女」1・2 雨の村人「赤い塔の家」 菅野菊枝「藕色の鞋子」 吉田絃二郎「巡礼の歌」1 渋澤青花「因果応報」	作者不明「尊き菓草」 吉田絃二郎「巡礼の歌」2	江見水蔭「黒蛮女」1・2 菅野菊枝「藕色の鞋子」 吉田絃二郎「巡礼の歌」1・2 渋澤青花「因果応報」 不明「尊き菓草」	雨の村人「赤い塔の家」
	大正8年 1月号	坪内士行「雛菊堤のおとよ」 菅野菊枝「一人の姉」 小川治平「寂しい別れ」1	杉山多香子「二つの林檎」 池田みすず「春を待つ日」 作者不明「欧州戦争で有名になつた婦人」 小川治平「寂しい別れ」2・3	坪内士行「雛菊堤のおとよ」 作者不明「欧州戦争で有名になつた婦人」 菅野菊枝「一人の姉」 小川治平「寂しい別れ」1・2	杉山多香子「二つの林檎」 池田みすず「春を待つ日」 小川治平「寂しい別れ」3
	大正8年 7月号	池田みすず「お話のものは」 池田亀鑑「安養尼のお話」	菅野菊枝「柿の花の咲く家」 村山至大「棺に納むる日」 渋澤青花「小さい牛乳屋さん」 坪内士行「雛菊堤のおとよ」1・2	菅野菊枝「柿の花の咲く家」 池田みすず「お話のものは」 坪内士行「雛菊堤のおとよ」1・2 渋澤青花「小さい牛乳屋さん」 池田亀鑑「安養尼のお話」	村山至大「棺に納むる日」
	大正9年 1月号	浅原鏡村「星廻りとお菓子」 大泉黒石「緑色のめかくし」 一記者「猫になつた少女の話」 松山思水「虚栄病院」 岩下小葉「空想の子」	加藤朝鳥「疑問の指先」	加藤朝鳥「疑問の指先」 大泉黒石「緑色のめかくし」 松山思水「虚栄病院」 岩下小葉「空想の子」 浅原鏡村「星廻りとお菓子」	一記者「猫になつた少女の話」

③ 大 正 後 期	大正9年 8月号	岩下小葉「花を探ねて」 鷹巢清二「小夜子ちゃんの 九官鳥」 大泉黒石「緑色のめかく し」1・2	清銚之助「おばあちゃんと 夜露」 江見水蔭「国境の少女」 一記者「美はしき心を抱い て天国へ上つた少女の涙の 物語」 浅原鏡村「海岸の教会堂」	岩下小葉「花を探ねて」 鷹巢清二「小夜子ちゃんの 九官鳥」 大泉黒石「緑色のめかく し」1・2 浅原鏡村「海岸の教会堂」 清銚之助「おばあちゃんと 夜露」 江見水蔭「国境の少女」 一記者「美はしき心を抱い て天国へ上つた少女の涙の 物語」	
	大正10年 2月号	原田なみち「さびしきいの ち」 浅原鏡村「悲しい喜劇」1 ・2 岩下小葉「人形の悩み」 宮崎三雄「びかびか小父さ ん」 水野葉舟「壊れた土塀」 長谷川時雨「巡礼【おつる】」	長田幹彦「草笛」 渡邊いく子「不幸な兄妹」 池田芙蓉「夜叉御前」 作者不明「赤いマントと白 い馬」	作者不明「赤いマントと白 い馬」 原田なみち「さびしきいの ち」 浅原鏡村「悲しい喜劇」 宮崎三雄「びかびか小父さ ん」 水野葉舟「壊れた土塀」 岩下小葉「人形の悩み」 長谷川時雨「巡礼【おつる】」	長田幹彦「草笛」 渡邊いく子「不幸な兄妹」 池田芙蓉「夜叉御前」
	大正10年 9月号	岩下小葉「七つ星の秘密」 一記者「楽壇の明星久野久 子女史生ひ立ちの記」 中島薄紅「音楽の先生」 作者不明「乙女の松原」	長田幹彦「草笛」 原田なみち「主なき声」 浅原鏡村「カロー」 霜田史光「さすらひの少 女」 元島英三「一本の桔梗」 一記者「楽聖少女セシリア の一生」	岩下小葉「七つ星の秘密」 一記者「楽壇の明星久野久 子女史生ひ立ちの記」 中島薄紅「音楽の先生」 元島英三「一本の桔梗」 作者不明「乙女の松原」 一記者「楽聖少女セシリア の一生」	浅原鏡村「カロー」 原田なみち「主なき声」 霜田史光「さすらひの少 女」 長田幹彦「草笛」
	大正11年 4月号	吉岡彌生「一分の暇を惜ん で刻苦勉強した私の少女時 代」 渡邊霞亭「十年の後」 山田邦子「人浚へに浚はれ て軽業師に売られた話」 大橋青波「運映の花」 一記者「貧民窟より出でて 大学教授に」 坪内清人「怪島の兄妹」 原田なみち「屋店で絵はが きを描いて売つたあの頃の 思ひ出」 大谷時三郎「天国より地上 へ」	久米正雄「海のささやき」 作者不明「紅つつじ物語」 浅原鏡村「限りなき嘆き」 小葉生「荒野のはて」	吉岡彌生「一分の暇を惜ん で刻苦勉強した私の少女時 代」 渡邊霞亭「十年の後」 山田邦子「人浚へに浚はれ て軽業師に売られた話」 大橋青波「運映の花」 一記者「貧民窟より出でて 大学教授に」 坪内清人「怪島の兄妹」 原田なみち「屋店で絵はが きを描いて売つたあの頃の 思ひ出」 久米正雄「海のささやき」 小葉生「荒野のはて」	浅原鏡村「限りなき嘆き」 作者不明「紅つつじ物語」 大谷時三郎「天国より地上 へ」
	大正11年 8月号	岩下小葉「目茶子の夏休み 日記」 奥野他見男「赤ちやんが物 いふた」 洪澤青花「鸚鵡の家」 作者不明「十字架」1・2 浅原鏡村「お鼻ピンピン」 1・2 池田芙蓉「汐はみちくる」 原田なみち「山の思ひ出」	久米正雄「海のささやき」 川上幸一「父を尋ねて」 三條さよ子「人魚の歌」	三條さよ子「人魚の歌」 川上幸一「父を尋ねて」 岩下小葉「目茶子の夏休み 日記」 奥野他見男「赤ちやんが物 いふた」 洪澤青花「鸚鵡の家」 作者不明「十字架」1・2 池田芙蓉「汐はみちくる」 原田なみち「山の思ひ出」 浅原鏡村「お鼻ピンピン」 1・2	久米正雄「海のささやき」

	大正12年 1月号	岩下小葉「ピアノのお稽古」 浅原鏡村「危いお靴と怖い羽子板」1・2 吉田絃三郎「雪の朝」1	須藤しげる「春の光」1・2 榊縁翠「夢みる母」 中島吉哉「お幸の一家」 三宅やす子「百合子の誕生日」 吉田絃三郎「雪の朝」2	岩下小葉「ピアノのお稽古」 浅原鏡村「危いお靴と怖い羽子板」1・2 須藤しげる「春の光」1・2 三宅やす子「百合子の誕生日」 吉田絃三郎「雪の朝」1	吉田絃三郎「雪の朝」2 榊縁翠「夢みる母」 中島吉哉「お幸の一家」
③	大正12年 8月号	佐々木邦「器量」 池田芙蓉「ある海岸の出来事」 山口臨鶴「あんらひどいわ」 石川星影「二つの道」1 藤野ゆかり「白百合の君」1・2 宮田眺湖「真紅の朝鮮服」1・2 丸出寛雄「壊されたメタル」1・2 海野厚「おひつこし」 白柳秀湖「摂津守の妻」 水野明子「海辺のみゆき」 小田巻ゆき子「慕ひゆく魂」	岡田光一郎「青いお母様」 北川千代子「黒髪」 石川星影「二つの道」2 渡部清子「熱涙」 井村清「貧と病に命がけて戦つてゐる孝女」 高橋富美枝「憂国の少女」	佐々木邦「器量」 池田芙蓉「ある海岸の出来事」 山口臨鶴「あんらひどいわ」 石川星影「二つの道」1 宮田眺湖「真紅の朝鮮服」1・2 丸出寛雄「壊されたメタル」1・2 高橋富美枝「憂国の少女」 水野明子「海辺のみゆき」 渡部清子「熱涙」 白柳秀湖「摂津守の妻」 小田巻ゆき子「慕ひゆく魂」	石川星影「二つの道」2 海野厚「おひつこし」 北川千代子「黒髪」 岡田光一郎「青いお母様」 藤野ゆかり「白百合の君」1・2 井村清「貧と病に命がけて戦つてゐる孝女」
大 正 後 期	大正13年 8月号	柳町子「永遠の微笑」1・2 横谷勝子「二重圏点の花」 深水正策「虫歯の悲劇」 浅原鏡村「哀れわが夏帽子」 大久保正一「雑巾の大作戦」 伊藤純一「活人画」1・2 岩下小葉「水車屋の娘」 岡田光一郎「別るる夜」1・2 闇野冥火「髑髏の笑ひ」1・2 有本芳水「湖畔小景」1・2 井東憲「王様とメリー」 平松太郎「大変な泥棒」1・2 三條さよ子「はかなきお約束」	大澤重雄「兄帰るまで」 中村千枝子「悲しき旅立ち」 遠山霞一「ナアレフの村」 下村千秋「誕生日の夜」 横山美智子「輝く徽章」 安部満里音「イタリアの危機」 昇龍膏貞丈「武士の娘」 須藤しげる「母のおもかげ」	柳町子「永遠の微笑」1・2 横谷勝子「二重圏点の花」 深水正策「虫歯の悲劇」 浅原鏡村「哀れわが夏帽子」 三條さよ子「はかなきお約束」 大久保正一「雑巾の大作戦」 伊藤純一「活人画」1・2 岩下小葉「水車屋の娘」 闇野冥火「髑髏の笑ひ」1・2 大澤重雄「兄帰るまで」 遠山霞一「ナアレフの村」 下村千秋「誕生日の夜」 横山美智子「輝く徽章」 安部満里音「イタリアの危機」 昇龍膏貞丈「武士の娘」 有本芳水「湖畔小景」1・2 井東憲「王様とメリー」 平松太郎「大変な泥棒」1・2	岡田光一郎「別るる夜」1・2 須藤しげる「母のおもかげ」 中村千枝子「悲しき旅立ち」
	大正13年 9月号	坂本茂子「お弁当」 石川星影「夏休みなんか早く行つてしまえ！」 横山美智子「思ひ出のゴム毯」1・2 岩下小葉「水車屋の娘」 闇野冥火「髑髏の笑ひ」1・2	横山銀吉「女優志願」1・2 西野美智子「淡路に帰る日」 柳川禮子「形身の絵姿」1・2	横山銀吉「女優志願」1・2 石川星影「夏休みなんか早く行つてしまえ！」 横山美智子「思ひ出のゴム毯」1・2 岩下小葉「水車屋の娘」 闇野冥火「髑髏の笑ひ」 坂本茂子「お弁当」 柳川禮子「形身の絵姿」2	柳川禮子「形身の絵姿」1 西野美智子「淡路に帰る日」

大 正 後 期	大正14年 1月号	光一郎「春やうららか」1・2 深水正策「アルプスの少女」 横山美智子「海鳥は唄ふ」1・2 芝佳吉「おかめいんこ」 闇野冥火「差しまねく影」 繁山鮎太郎「妖怪の窓」 浅原鏡村「元日はこりこり」 田中孝一郎「世界少女美人伝」・(衣通姫)・(光明皇后)・(クレオパトラ)・(ペアトリチエ)・(プロシヤ女王ルイゼ)・(楊貴妃) 渡邊清「小鳩の君」1 鏡村「つどひのあと」	宮崎一雨「越路の女仇討」 財津あずさ「ピアノよさよなら」 永田京子「十六の春」 渡邊清「小鳩の君」2 岡田光一郎「雪の上を行く櫛」 太田清文「鳴くな鴉よ」 田中孝一郎「世界少女美人伝」・(静御前)・(虞美人) 花村珠子「海の嘆き」	光一郎「春やうららか」1・2 深水正策「アルプスの少女」 永田京子「十六の春」 繁山鮎太郎「妖怪の窓」 横山美智子「海鳥は唄ふ」1・2 芝佳吉「おかめいんこ」 闇野冥火「差しまねく影」 宮崎一雨「越路の女仇討」 浅原鏡村「元日はこりこり」 岡田光一郎「雪の上を行く櫛」 渡邊清「小鳩の君」1 鏡村「つどひのあと」 花村珠子「海の嘆き」 田中孝一郎「世界少女美人伝」・(静御前)・(光明皇后)・(クレオパトラ)・(プロシヤ女王ルイゼ)・(虞美人)・(楊貴妃)	財津あずさ「ピアノよさよなら」 太田清文「鳴くな鴉よ」 渡邊清「小鳩の君」2 田中孝一郎「世界少女美人伝」・(衣通姫)・(ペアトリチエ)
	大正14年 8月号	坂本繁子「玲子の妹」 深水正策「アルプスの少女」 横山美智子「海鳥は唄ふ」1・2 闇野冥火「差しまねく影」1・2	浅原鏡村「不思議な迷宮」 岡田光一郎「もう一人の篤子」 伊藤純一「幽霊塔の姉弟」 今村富士子「葡萄園の娘」	深水正策「アルプスの少女」 横山美智子「海鳥は唄ふ」1・2 闇野冥火「差しまねく影」1 浅原鏡村「不思議な迷宮」 岡田光一郎「もう一人の篤子」 伊藤純一「幽霊塔の姉弟」 今村富士子「葡萄園の娘」	坂本繁子「玲子の妹」 闇野冥火「差しまねく影」2
	大正15年 10月号	戸川貞雄「心病みて」 岡田光一郎「天使園の少女」 武川重太郎「利巧なエルザ」 藤森淳三「孤児メリー」 闇野冥火「青い小蛇の死」 玉村羊子「アリス不思議国探検」 浅井六朗「彼女の秋」	津村京村「美しき身替り」1・2 間宮茂輔「破れゆく夢」 堀木克三「友のために」 西谷勢之介「人形塚」 木蘇穀「文人さんの像」 横山美智子「小さい兵隊」	戸川貞雄「心病みて」 岡田光一郎「天使園の少女」 武川重太郎「利巧なエルザ」 藤森淳三「孤児メリー」 横山美智子「小さい兵隊」 闇野冥火「青い小蛇の死」 玉村羊子「アリス不思議国探検」 津村京村「美しき身替り」1・2 堀木克三「友のために」 木蘇穀「文人さんの像」	西谷勢之介「人形塚」 間宮茂輔「破れゆく夢」 浅井六朗「彼女の秋」
	昭和2年 4月号	長谷川浩三「歓喜の涙」1 大河内ヨハネ「大地のはて」 田中宇一郎「敵へのりこむ少女」 木蘇穀「真珠の玉」1 藤森淳三「孤児メリー」 洪澤青花「旅路の果」 横山美智子「光りあれ」 藤本斥夫「風にさばかる」	長谷川浩三「歓喜の涙」2 猪間驩二「司令官の娘」 伊藤純一「血に咲く名花」 秦夜美「ああ信号の手よ」 堀江かど江「父を待つ娘」 少女の友編集部編「貞婦の真心」・「湖上の美人」・「弁の内侍」 作者不明「凍りつく夜の街灯に屋台をひき一家六人を	長谷川浩三「歓喜の涙」1・2 大河内ヨハネ「大地のはて」 田中宇一郎「敵へのりこむ少女」 木蘇穀「真珠の玉」1・2 藤森淳三「孤児メリー」 洪澤青花「旅路の果」 横山美智子「光りあれ」 藤本斥夫「風にさばかる」	堀江かど江「父を待つ娘」 少女の友編集部編「貞婦の真心」・「オフエリア姫」 青山櫻州「燃ゆる夜空」

	<p>昭和2年 4月号</p>	<p>少女の友編集部編「八百屋お七」・「海の嘆き」・「炎の熱情」・「オフエリア姫」・「牡丹灯籠」 浅原鏡村「逆転する幸福」1・2</p>	<p>養ふ孝行少女安子さん 作者不明「胃癌の父と肺炎の母を養ふ殊気な少女とその友の熱き友情」 作者不明「犠牲献身少女熱情談話」1・2・3 青山櫻州「燃ゆる夕空」 木蘇毅「真珠の玉」2</p>	<p>猪間驩二「司令官の娘」 伊藤純一「血に咲く名花」 秦夜美「ああ信号の手よ」 少女の友編集部編「八百屋お七」・「海の嘆き」・「炎の熱情」・「湖上の美人」・「弁の内侍」・「牡丹灯籠」 作者不明「凍りつく夜の街灯に屋台をひき一家六人を養ふ孝行少女安子さん」 作者不明「胃癌の父と肺炎の母を養ふ殊気な少女とその友の熱き友情」 作者不明「犠牲献身少女熱情談話」1・2・3 浅原鏡村「逆転する幸福」1・2</p>	
<p>④ 昭和 初 期</p>	<p>昭和4年 5月号</p>	<p>巽七朗「れろれん復讐」 二宮伊平「こはれた腕時計」1・2 西條八十「家なき娘」 井上紀美子「謎の青玉」1・2 仁科春彦「混線姉妹」1・2 藤本勝一「新少女日記」1・2・3 橋爪健「少女十字軍」1・2 廣岡瀧太郎「死魚の眼」 大河内翠山「女武者修行」2 浅原鏡村「はるけき空」2</p>	<p>横山美智子「母の絵姿」 加藤武雄「緑の丘」 浅原鏡村「はるけき空」1 加藤まさを「猿のお公」 作者不明「父を思ひて」 大河内翠山「女武者修業」1</p>	<p>巽七朗「れろれん復讐」 二宮伊平「こはれた腕時計」1・2 浅原鏡村「はるけき空」2 西條八十「家なき娘」 橋爪健「少女十字軍」1・2 藤本勝一「新少女日記」1・2・3 仁科春彦「混線姉妹」1・2 井上紀美子「謎の青玉」1・2 廣岡瀧太郎「死魚の眼」 横山美智子「母の絵姿」 加藤武雄「緑の丘」 加藤まさを「猿のお公」 大河内翠山「女武者修業」1・2</p>	<p>不明「父を思ひて」 浅原鏡村「はるけき空」1</p>
	<p>昭和4年 6月号</p>	<p>木蘇毅「悲しき父と娘」 斯波茅郎「ジャズ娘」 西條八十「家なき娘」 橋爪健「少女十字軍」1・2 居猿澤信吉「夜会の花」 井上紀美子「謎の青玉」1・2 仁科春彦「混線姉妹」1・2 横山美智子「嵐の小夜曲」1・2 藤本勝一「新少女日記」1・2・3 浅原鏡村「はるけき空」2 瓜生健二「鈴蘭物語」</p>	<p>岡田光一郎「亡き人の妹病める」 三條さよ子「香水の匂ひ」 加藤武雄「緑の丘」 廣岡瀧太郎「死魚の眼」 浅原鏡村「はるけき空」1 大河内翠山「女武者修業」 二宮伊平「星はまたたく」 内山基「母の憶ひ出」</p>	<p>斯波茅郎「ジャズ娘」 西條八十「家なき娘」 橋爪健「少女十字軍」1・2 木蘇毅「悲しき父と娘」 井上紀美子「謎の青玉」1・2 仁科春彦「混線姉妹」1・2 横山美智子「嵐の小夜曲」1・2 藤本勝一「新少女日記」1・2・3 岡田光一郎「亡き人の妹病める」 加藤武雄「緑の丘」 廣岡瀧太郎「死魚の眼」 大河内翠山「女武者修業」 二宮伊平「星はまたたく」 内山基「母の憶ひ出」 瓜生健二「鈴蘭物語」 浅原鏡村「はるけき空」2</p>	<p>浅原鏡村「はるけき空」1 三條さよ子「香水の匂ひ」 居猿澤信吉「夜会の花」</p>

④ 昭 和 初 期	昭和6年 5月号	吉屋信子「櫻貝」1・2 長田幹彦「悩める鈴蘭」 牧田行生「悪魔の小夜曲」 佐藤京子「乳房の秘密」1 仁科春彦「南部の鉄瓶」 岩下小葉「屋根裏の女王」 寺尾幸夫「級長選挙」 内山基「弟」 岡村ふさ子「街の小母さん」 三條さよ子「銀の十字架」 城しづか「優しいママさん」 石島菊枝「藤色のドレス」 浅原六朗「港の笛」	小山勝清「夕陽沈む時」1 ・2 上田エルザ「かがやく丘」 佐藤京子「乳房の秘密」2 池田芙蓉「哀しき野菊」	吉屋信子「櫻貝」1・2 牧田行生「悪魔の小夜曲」 小山勝清「夕陽沈む時」1 ・2 佐藤京子「乳房の秘密」1 ・2 仁科春彦「南部の鉄瓶」 岩下小葉「屋根裏の女王」 寺尾幸夫「級長選挙」 岡村ふさ子「街の小母さん」 内山基「弟」 城しづか「優しいママさん」 石島菊枝「藤色のドレス」	上田エルザ「かがやく丘」 三條さよ子「銀の十字架」 池田芙蓉「哀しき野菊」 浅原六朗「港の笛」 長田幹彦「悩める鈴蘭」
	昭和8年 10月号	吉屋信子「からたちの花」 1・2 島本志津夫「天職先生」 田郷虎雄「お兄さんは日本 一」1 内山基「お誕生日」 岡田光一郎「向日葵の萎む 秋」 水野奈美子「経験」 牧みどり「仲よし」1・2 上田エルザ「二つの揺籃」1 藤浦洗「星飛ぶ丘」 岩下恵美子「小さき妹」 サトウハチロー「たんぼぼ 倶楽部」	大佛次郎「雲雀の唄」 横山美智子「青空の子」 田郷虎雄「お兄さんは日本 一」2 上田エルザ「二つの揺籃」2	吉屋信子「からたちの花」 1・2 島本志津夫「天職先生」 田郷虎雄「お兄さんは日本 一」1 内山基「お誕生日」 水野奈美子「経験」 牧みどり「仲よし」1・2 上田エルザ「二つの揺籃」1 藤浦洗「星飛ぶ丘」 岩下恵美子「小さき妹」 大佛次郎「雲雀の唄」 サトウハチロー「たんぼぼ 倶楽部」	上田エルザ「二つの揺籃」2 横山美智子「青空の子」 岡田光一郎「向日葵の萎む 秋」 田郷虎雄「お兄さんは日本 一」2
	昭和10年 6月号	吉屋信子「小さき花々」 サトウハチロー「ベレーの 合唱」 飛鳥清彦「薔薇の街」1・ 2 岩下恵美子「ハイヂ」 佐々木右司「青龍堂主人」 由利聖子「チビ君の遠足」 島本志津夫「犬と猫と」1 ・2 岡村ふさ子「あこがれ」 内山基「白い椿」1・2 吉川英治「胡蝶陣」 浅原六朗「元祖になつたミ ヤ子」	上田エルザ「暁の野ばら」1 ・2 谷口清子「遠き母」	吉屋信子「小さき花々」 岡村ふさ子「あこがれ」 サトウハチロー「ベレーの 合唱」 飛鳥清彦「薔薇の街」1 岩下恵美子「ハイヂ」 佐々木右司「青龍堂主人」 由利聖子「チビ君の遠足」 島本志津夫「犬と猫と」1 ・2 上田エルザ「暁の野ばら」1 ・2 内山基「白い椿」1・2 谷口清子「遠き母」 浅原六朗「元祖になつたミ ヤ子」	吉川英治「胡蝶陣」 飛鳥清彦「薔薇の街」2
	昭和10年 9月号	吉屋信子「小さき花々」1・2 サトウハチロー「ベレーの 合唱」 桑原至「山の唄」 飛鳥清彦「薔薇の街」1・2 岩下恵美子「ハイヂ」 佐々木右司「青龍堂主人」 由利聖子「二つのお墓」1・2 島本志津夫「サンマーハウ ス」 浅原六朗「月明に咲く花」 北村小松「マニラで逢つた 少女」1・2 上田エルザ「暁の野ばら」 1・2	濱路ゆふ子「お母様」 上田エルザ「暁の野ばら」3	吉屋信子「小さき花々」1・2 サトウハチロー「ベレーの 合唱」 飛鳥清彦「薔薇の街」1 岩下恵美子「ハイヂ」 佐々木右司「青龍堂主人」 由利聖子「二つのお墓」1・2 島本志津夫「サンマーハウ ス」 浅原六朗「月明に咲く花」 濱路ゆふ子「お母様」 桑原至「山の唄」 上田エルザ「暁の野ばら」 1.2 北村小松「マニラで逢つた 少女」1	北村小松「マニラで逢つた 少女」2 上田エルザ「暁の野ばら」3 飛鳥清彦「薔薇の街」2

	<p>昭和11年 1月号</p>	<p>船橋聖一「花に罪なし」 岡田光一郎「凧」 上田エルザ「暁の野ばら」 1・2 浅原六朗「月明に咲く花」 由利聖子「威張つてゐた子」 岩下恵美子「秘密の花園」 山中峯太郎「祖国の鐘」2 田村泰次郎「南風薫るところ」1・2 龍卓「踊る魂」 黒百合子「土に芽ぐむ者」 吉屋信子「司馬家の子供部屋」</p>	<p>今井達夫「青銅の鳩」 山中峯太郎「祖国の鐘」1</p>	<p>船橋聖一「花に罪なし」 島本志津夫「アメリカ人形」1・2 浅原六朗「月明に咲く花」 由利聖子「威張つてゐた子」 上田エルザ「暁の野ばら」 1・2 岩下恵美子「秘密の花園」 岡田光一郎「凧」 山中峯太郎「祖国の鐘」1・2 田村泰次郎「南風薫るところ」1・2 吉屋信子「司馬家の子供部屋」 龍卓「踊る魂」 黒百合子「土に芽ぐむ者」</p>	<p>今井達夫「青銅の鳩」</p>
<p>④ 昭和 和 初 期</p>	<p>昭和11年 8月号</p>	<p>島本志津夫「若い家庭教師」1・2 山中峯太郎「祖国の鐘」2 由利聖子「海への参加申込書」 浅原六朗「星の世界」 上田エルザ「雛嚙栗の唄」 1・2 矢田津世子「別れの夜曲」 1・2 岩下恵美子「秘密の花園」 田村泰次郎「南風薫るところ」1・2 黒百合子「灯をともし者」 飛鳥清彦「南海子」2・3</p>	<p>飛鳥清彦「南海子」1 吉屋信子「司馬家の子供部屋」 山中峯太郎「祖国の鐘」1・3</p>	<p>島本志津夫「若い家庭教師」1 吉屋信子「司馬家の子供部屋」 由利聖子「海への参加申込書」 浅原六朗「星の世界」 上田エルザ「雛嚙栗の唄」 1・2 矢田津世子「別れの夜曲」 1・2 岩下恵美子「秘密の花園」 田村泰次郎「南風薫るところ」1・2 黒百合子「灯をともし者」 山中峯太郎「祖国の鐘」1・2・3 飛鳥清彦「南海子」1・2・3</p>	<p>島本志津夫「若い家庭教師」2</p>
	<p>昭和12年 1月号</p>	<p>島本志津夫「紛失した女王様」1・2 浅原六朗「星の世界」 上田エルザ「雛嚙栗の唄」 船橋聖一「雪は白妙」1・2 深尾須磨子「柴の折戸」1・2 吉田絃二郎「山遠ければ」1・2 飛鳥清彦「南海子」2 吉屋信子「小さき花々」 由利聖子「海と山のユーモア通信」</p>	<p>山中峯太郎「祖国の鐘」1・2 田郷虎雄「若草日記」 内山基「青い花」 桑原至「三つの林檎」 笹松昭夫「人さらひと少女」 飛鳥清彦「南海子」1</p>	<p>島本志津夫「紛失した女王様」1・2 浅原六朗「星の世界」 上田エルザ「雛嚙栗の唄」 船橋聖一「雪は白妙」1・2 深尾須磨子「柴の折戸」1・2 吉田絃二郎「山遠ければ」1・2 飛鳥清彦「南海子」1・2 吉屋信子「小さき花々」 由利聖子「海と山のユーモア通信」 山中峯太郎「祖国の鐘」1・2 桑原至「三つの林檎」 内山基「青い花」</p>	<p>笹松昭夫「人さらひと少女」 田郷虎雄「若草日記」</p>

④ 昭 和 初 期	昭和12年 8月号	有馬美沙「赤い葉」1・2 岩下恵美子「幸福の花」 田郷虎雄「若草日記」 上田エルザ「花散る丘」1 ・2 内山基「永久に」1 山中峯太郎「聖なる翼」 島本志津夫「夏の計画」2 吉屋信子「心の花」 由利聖子「海と山のユーモ ア通信」 川端康成「乙女の港」1・2	島本志津夫「夏の計画」1 浅原六朗「兄いもうと」 内山基「永久に」2	有馬美沙「赤い葉」2 岩下恵美子「幸福の花」 田郷虎雄「若草日記」 上田エルザ「花散る丘」1 ・2 内山基「永久に」1 島本志津夫「夏の計画」1 ・2 山中峯太郎「聖なる翼」 吉屋信子「心の花」 由利聖子「海と山のユーモ ア通信」 川端康成「乙女の港」1・ 2	有馬美沙「赤い葉」1 内山基「永久に」2 浅原六朗「兄いもうと」
	昭和13年 1月号	島本志津夫「短い上衣」 田郷虎雄「双葉と美鳥」1 ・2 上田エルザ「花散る丘」1 ・2 山中峯太郎「聖なる翼」 由利聖子「あまのじやく合 戦」1・2 川端康成「乙女の港」1・ 2 吉屋信子「伴先生」	浅原六朗「兄いもうと」 江田ミユキ「白菊」 岩下恵美子「花籠」	島本志津夫「短い上衣」 岩下恵美子「花籠」 田郷虎雄「双葉と美鳥」1 上田エルザ「花散る丘」1 ・2 山中峯太郎「聖なる翼」 由利聖子「あまのじやく合 戦」1・2 川端康成「乙女の港」1・2 吉屋信子「伴先生」 浅原六朗「兄いもうと」	江田ミユキ「白菊」 田郷虎雄「双葉と美鳥」2
	昭和13年 8月号	川端康成「花日記」1・2 ・3 山本治子「五ツ葉」1・2 田郷虎雄「双葉と美鳥」1 ・2 西條八十「古都の乙女」 吉屋信子「伴先生」1・2 由利聖子「あまのじやく合 戦」1・2 田島準子「あこがれ」1・ 2・3 島本志津夫「赤い木ビー ズ」	浅原六朗「兄いもうと」 岩下恵美子「ロブとネ リー」	川端康成「花日記」1・2 ・3 山本治子「五ツ葉」1・2 田郷虎雄「双葉と美鳥」1 西條八十「古都の乙女」 吉屋信子「伴先生」1・2 由利聖子「あまのじやく合 戦」1・2 田島準子「あこがれ」1・ 2・3 浅原六朗「兄いもうと」 島本志津夫「赤い木ビー ズ」	田郷虎雄「双葉と美鳥」2 岩下恵美子「ロブとネ リー」
	昭和14年 1月号	川端康成「花日記」1・2 ・3 島本志津夫「給仕さんの正 月」 西條八十「古都の乙女」 吉屋信子「伴先生」 由利聖子「次女日記」 富倉良子「リラの花」 日吉早苗「隣のお嬢さん」 1・2	芹澤光治良「月光の曲」 田郷虎雄「理恵子の手帖」 山本治子「鳥籠」 山中峯太郎「黄砂に昇る太 陽」 岩下恵美子「ロブとネ リー」	川端康成「花日記」1・2 ・3 島本志津夫「給仕さんの正 月」 西條八十「古都の乙女」 吉屋信子「伴先生」 由利聖子「次女日記」 富倉良子「リラの花」 日吉早苗「隣のお嬢さん」 1・2 芹澤光治良「月光の曲」 田郷虎雄「理恵子の手帖」 山中峯太郎「黄砂に昇る太 陽」	山本治子「鳥籠」 岩下恵美子「ロブとネ リー」

⑤ 戦 時 下	昭和14年 8月号	日吉早苗「老朋友先生」1・2 内山基「白い船」1・2 芹澤光治良「山荘の道」1・2 上田エルザ「萬美子の花束」 吉屋信子「乙女手帖」1・2 作者不明「少女生活日記」1 島本志津夫「デパートの便衣隊」 川畑康成「美しい旅」	岡田禎子「海辺にて」1・2 田郷虎雄「理恵子の手帖」 山中峯太郎「黄砂に昇る太陽」 岩下恵美子「ロブとネリー」 作者不明「少女生活日記」2 由利聖子「次女日記」	日吉早苗「老朋友先生」1・2 内山基「白い船」1・2 吉屋信子「乙女手帖」1・2 作者不明「少女生活日記」1 島本志津夫「デパートの便衣隊」 由利聖子「次女日記」 上田エルザ「萬美子の花束」 岡田禎子「海辺にて」1・2 田郷虎雄「理恵子の手帖」 山中峯太郎「黄砂に昇る太陽」 川畑康成「美しい旅」	芹澤光治良「山荘の道」1・2 作者不明「少女生活日記」2 岩下恵美子「ロブとネリー」
	昭和15年 1月号	林芙美子「ともだち」1・2 島本志津夫「姉の結婚」1・2 由利聖子「小さい先生」 吉屋信子「乙女手帖」1 井伏鱒二「オコマさん」 相良慧子「光を待つ」1.2 谷崎精二「花と空瓶」1	内山基「白い燈台」1・2 吉屋信子「乙女手帖」2 谷崎精二「花と空瓶」2 川畑康成「美しい旅」 田代三彌子「花吹雪」1・2	林芙美子「ともだち」1・2 島本志津夫「姉の結婚」1・2 由利聖子「小さい先生」 吉屋信子「乙女手帖」1・2 井伏鱒二「オコマさん」 内山基「白い燈台」1・2 相良慧子「光を待つ」1.2 田代三彌子「花吹雪」1 谷崎精二「花と空瓶」1 川畑康成「美しい旅」	田代三彌子「花吹雪」2 谷崎精二「花と空瓶」2
	昭和15年 8月号	美川きよ「自然の踊り子」1 吉屋信子「小さき花々」 芹澤光治良「愛すべき哉」1・2	芹澤光治良「愛すべき哉」3 由利聖子「小さい先生」1・2 内山基「白い燈台」1・2 島本志津夫「レモン・ビスケット」1・2 川畑康成「美しい旅」 室生犀星「緑色の日記」 山岡荘八「銀河」 美川きよ「自然の踊り子」2	内山基「白い燈台」1・2 島本志津夫「レモン・ビスケット」1・2 美川きよ「自然の踊り子」1・2 吉屋信子「小さき花々」 芹澤光治良「愛すべき哉」1・2・3 由利聖子「小さい先生」1・2 川畑康成「美しい旅」 室生犀星「緑色の日記」 山岡荘八「銀河」	
	昭和16年 1月号	島本志津夫「古いヴァイオリン」 駿河奈美子「波」1 芹澤光治良「愛すべき哉」1 吉屋信子「少女期」1・2 由利聖子「蓄物語」 山本周五郎「鼓くらべ」	火野葦平「花の命」 川畑康成「美しい旅」 大佛次郎「冬の太陽」 駿河奈美子「波」2 芹澤光治良「愛すべき哉」2・3 藤野美知世「赤いリボン」	島本志津夫「古いヴァイオリン」 駿河奈美子「波」1 芹澤光治良「愛すべき哉」1・2・3 火野葦平「花の命」 川畑康成「美しい旅」 由利聖子「蓄物語」 山本周五郎「鼓くらべ」 藤野美知世「赤いリボン」 吉屋信子「少女期」1・2	駿河奈美子「波」2 大佛次郎「冬の太陽」
	昭和16年 8月号	芹澤光治良「愛すべき哉」1・2 由利聖子「蓄物語」 吉屋信子「少女期」2 島本志津夫「当番日誌より」1	火野葦平「花の命」 大佛次郎「冬の太陽」 元木國雄「しめぢ」 山手樹一郎「明月の妻」 吉屋信子「少女期」1 島本志津夫「当番日誌より」2	芹澤光治良「愛すべき哉」1・2 由利聖子「蓄物語」 吉屋信子「少女期」1・2 島本志津夫「当番日誌より」1・2 火野葦平「花の命」 大佛次郎「冬の太陽」 元木國雄「しめぢ」 山手樹一郎「明月の妻」	

昭和17年 1月号	大佛次郎「冬の太陽」 由利聖子「五月物語」	川端康成「美しい旅」1・2 芹澤光治良「けなげな娘達」1・2 橘外男「将軍の令嬢」 島本志津夫「病院の窓」1・2	大佛次郎「冬の太陽」 由利聖子「五月物語」 島本志津夫「病院の窓」1.2 川端康成「美しい旅」1・2 芹澤光治良「けなげな娘達」1・2	橘外男「将軍の令嬢」
昭和17年 8月号		川端康成「美しい旅」 芹澤光治良「けなげな娘達」1・2 和田傳「草々の蔭に」	川端康成「美しい旅」 芹澤光治良「けなげな娘達」1・2 和田傳「草々の蔭に」	
昭和18年 2月号	元木國雄「中将姫」 神崎清「宮城野の春」	橘外男「将軍の令嬢」 大地唯雄「命のかぎり」1・2・3 サトウ・ハチロー「青空より青く」	元木國雄「中将姫」 サトウ・ハチロー「青空より青く」 大地唯雄「命のかぎり」1・2・3 神崎清「宮城野の春」	橘外男「将軍の令嬢」
昭和18年 8月号	船橋聖一「若い手」1・2	サトウ・ハチロー「青空より青く」 大地唯雄「命のかぎり」1・2	船橋聖一「若い手」1・2 サトウ・ハチロー「青空より青く」 大地唯雄「命のかぎり」1・2	
昭和19年 1月号		サトウ・ハチロー「青空より青く」 大地唯雄「命のかぎり」 和田傳「遠くの友だち」1・2 船橋聖一「若い手」1・2	サトウ・ハチロー「青空より青く」 大地唯雄「命のかぎり」 和田傳「遠くの友だち」1・2 船橋聖一「若い手」1・2	
昭和19年 8月号		中里恒子「寄宿舎にて」1・2 大地唯雄「命のかぎり」1・2 サトウ・ハチロー「青空より青く」	大地唯雄「命のかぎり」1・2 サトウ・ハチロー「青空より青く」 中里恒子「寄宿舎にて」1・2	
昭和20年 2月号	坪井栄「寒椿」	サトウ・ハチロー「青空より青く」1・2 大地唯雄「命のかぎり」1・2	サトウ・ハチロー「青空より青く」1・2 坪井栄「寒椿」 大地唯雄「命のかぎり」1・2	
昭和20年 4月号		サトウ・ハチロー「青空より青く」1・2 大地唯雄「命のかぎり」1・2	サトウ・ハチロー「青空より青く」1・2 大地唯雄「命のかぎり」1・2	

注1) 題名の後の「1」,「2」などの番号は、小説中の少女像が複数である場合、一つめの少女像を「1」、二つめの少女像を「2」などと番号をつけて分類したことを示している。

資料：『少女の友』実業之日本社刊（大阪国際児童文学館）